日英中トライリンガル育成のための高大接続

事業報告書

2017（平成29年度）

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）

大学教育再生加速プログラム

杏林大学

日英中トライリンガル育成のための高大接続

事業報告書

2017（平成29年度）

文部科学省 大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ（高大接続）

大学教育再生加速プログラム

杏林大学

杏林大学 事業報告書

目　次

Ⅰ．ごあいさつ

大学教育再生加速プログラム：高大接続
学長　跡見　裕 …… 1

アドバンスト・プレイスメントで、より充実した大学生活を
高大接続推進室長　稲垣　大輔 …… 2

Ⅱ．事業概要・計画

…… 3

Ⅲ．事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム　テーマⅢ：高大接続
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 29 年度実績概要 …… 7

Ⅳ．事業実績の具体的内容

〈運営〉
1．事業体制の強化 …… 17

〈高大接続〉
2.「杏林 AP ラウンドテーブル」の開催 …… 18

3．連携協定書の調印 …… 22

4．高校と大学をつなぐ FD/SD の開催 …… 23

5．連携高等学校との意見交換 …… 25

〈行事／教育〉
6．ライティングセンターの活動実績と成果 … 28
Kyorin Writing Center
Annual Report 2017 - 2018

7．アドバンスト・プレイスメントの実施と生徒募集 …… 33

8．大学教養レベル「グローバル関連科目」高校生への開放 …… 35

9．グローバル関連科目・COC 関連科目の高校生への開放 …… 36

10．日英中トライリンガルキャンプの実施 … 37

11．英語キャンプの実施 …… 39

12．中国語研修の実施 …… 40

13．プレゼンテーションコンテストの実施 … 41
【英語プレゼンテーションコンテスト 2017】
【中国語カラオケ大会・吹き替え大会】

14．グローバル AP「同時通訳ブース見学会」の実施 …… 43

15．グローバル AP「ライティングセミナー」の実施 …… 44

16．IELTS 対策講座と試験実施 …… 45

17．ルーブリックの改良と入学試験での適応 …… 46

18．高等学校での講演 …… 47

〈波及効果〉
19．聖徳学園中高生ピアサポーターのいじめ防止活動を支援する大学生のピアエデュケーション活動 …… 51

20. 神奈川総合高等学校の生徒が
井の頭キャンパスで大学体験 …… 52

21. 青梅総合高等学校と昭和鉄道高等学校の
生徒４名がインターンシップを体験 …… 53

22. 三鷹中等教育学校生徒が職場見学および
職場体験 …… 54

23. 聖徳学園高校生への医学部での
「電子顕微鏡」の実習開催…… 55

24. おもてなしボランティア
「英語＆観光ワークショップ」の実施…… 56

25. 馬田啓一賞を関東国際高等学校生徒が
受賞 …… 57

26. 順天高校の生徒に対し保健学部で
ＤＮＡ関連技術実習を実施 …… 58

〈広報活動〉
27. マスコミ取材 …… 59

28. 平成 28 年度事業報告書の作成と配布 … 60

〈会議開催日程一覧〉
29. 杏林 AP 推進委員会 …… 61

30. 高大接続推進委員会 …… 63

Ⅴ．事業の評価：平成 28 年度事業を対象に

第三者評価委員会の開催と評価結果…… 65

Ⅵ．中間評価を受審（平成 26 年度~平成 28 年度を対象）

…… 67

Ⅶ．事業推進組織　委員一覧

…… 68

Ⅰ．ごあいさつ

大学教育再生加速プログラム：高大接続

学長　跡見　裕

大学教育の質的変換が求められている中で、杏林大学は様々な試みをしています。特に文部科学省の平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム：日英中トライリンガル育成のための高大接続」に採択されたことは、私どもの取り組みに質的な変化をもたらし、本学の教育改革により幅を持たせるものとなりました。従来の大学教育改革は当然の事ながら大学側から見たものでしたが、高等学校との緊密な連携を図ることにより、高大接続の重要さを含め、高校側からの視点の意義を強く認識するものとなったと言えましょう。このことは、全学をあげて見直したディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーにもよく反映されております。この 3 ポリシーの一体的な策定は大学教育の根幹をなすものであり、本学が入学してほしいと考える学生像を明確にし、それを高大接続という形で動かして行く方向性を示したと考えております。

杏林大学においては、平成 22 年度から実施された第 2 次中期計画において高大連携推進実行部会を作り高等学校との連携を深め、杏林大学の持つ教育・研究資源を高等学校に開放し、スプリングセミナー、インターンシップなどで高等学校と連携を深めてきました。

平成 24 年度には外国語学部を中心とする教育目標とその成果が評価をされ、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業：経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に採択され教育のグローバル化が一層加速しました。平成 25 年度には同省の「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、今まで以上に地域社会への貢献を目指し、Moving Global, Staying Local　のキャッチフレーズの下、足元の地域社会を支える人材からグローバルに活躍できる学生まで幅広い人材育成に務めてきました。

今進めている「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、そのような今までの積極的な取り組みを基盤にしています。杏林大学と高等学校、特に SGH（スーパーグローバルハイスクール）やグローバル教育を目指す高等学校との意見交換と連携・接続を強化していきます。ルーブリック、ポートフォリオの作成も行ない、昨年度は、外国語学部のＡＯ入試（グローバル型）で利用しました。さらに高校生が大学の開講科目を履修し、大学入学後に卒業に必要な単位として認定するアドバンスト・プレイスメント（AP）を開始しました。平成 30 年度には、AP で科目を履修した学生が総合政策学部と外国語学部にそれぞれ 1 名ずつ入学しました。高校と単一の大学間での AP でなく、複数の大学での AP がより高校生にとって重要と考え、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学とも単位互換協定を締結いたしました。高校生がしっかりとした目的意識を持って大学に入学でき入学後の学修がスムーズに行えるように、教育目的や教育方法の開発としっかりとした学習成果の評価を行える仕組みを、高等学校と共にさらに進めていきます。

今後の取り組みについて，関係者一同努力するつもりですので，何卒ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

アドバンスト・プレイスメントで、より充実した大学生活を

高大接続推進室長　稲垣　大輔

平成26年度大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ：高大接続として採択され、今年度で5年目に入る事業は、「**日英中トライリンガル育成のための高大接続**」です。昨年度は中間評価を受審し、「A」評価をいただきました。

本事業は、グローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との高大連携・高大接続を主眼として、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速させることを目的としています。採択後、毎年計4回の**日英中トライリンガルキャンプ**という宿泊型学修機会を提供し、留学経験者や海外からの留学生を中心とする本学学部生と国際志向の強い高校生の皆さんに、学年や学校の枠を超えて交流し、英語・中国語・日本語の重要性を実体験してもらいました。

井の頭キャンパス移転後、交通・アクセスの利便性が向上し、高大連携・高大接続の機会が増加しました。一作年度から、夏季休業期間に3科目の**高校生対象の大学教養レベル「グローバル関連科目」**を開講し、本年度は保健学部の科目も開講される予定です。大学祭時には、高大接続した形での**英語・中国語プレゼンテーションコンテスト**を実施しています。**ライティングセンター**では、特任講師の指導のもと、学部3・4年生の上級生がピアチューターとして下級生や高校生の語学力向上のための学修支援に取り組んでいます。高校生対象の**ライティングセミナー**も実施し、高校生の自己表現能力の向上に一役買っています。一方、教職員も、グローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校関係者と、互いの教育目標や教育内容・方法についての相互理解を図るため、**杏林APラウンドテーブル**と呼ぶ意見交換会を継続開催し、今年5月の開催で12回を数えます。

さらに昨年度は、高校生が大学の開講科目を履修し、大学入学後に大学の卒業に必要な単位として認定する**アドバンスト・プレイスメント**を開始しました。桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学とも単位互換協定を締結し、より多くの大学で高校時に杏林大学で修得した単位を認めてもらえるよう制度普及を図っています。

高校3年次にアドバンスト･プレイスメントにより本学で単位を取得した高校生が外国語学部に入学し、入学後、卒業に必要な単位として4単位認定されました。より多くの高校生の皆さんが、このアドバンスト・プレイスメントという制度を用いて、大学入学後に留学にチャレンジしたり、主体的に学びの質を向上させ、より充実した大学生活を送っていただきたいと願っています。

本事業に対し、引続き皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

Ⅱ．事業概要・計画

本事業は、平成 24 年度に文科省補助事業のグローバル人材育成事業に採択されたことを受け、その成果を高大接続にも波及させることを目的としている。

4 つの柱として、①アドバンストプレイスメント制度の導入、②ルーブリックの開発と入試での使用、③高校生と大学生が共に学ぶ多彩な学修イベントの開催、④英語のライティング力の向上のためのライティングセンターの設置と運営である。

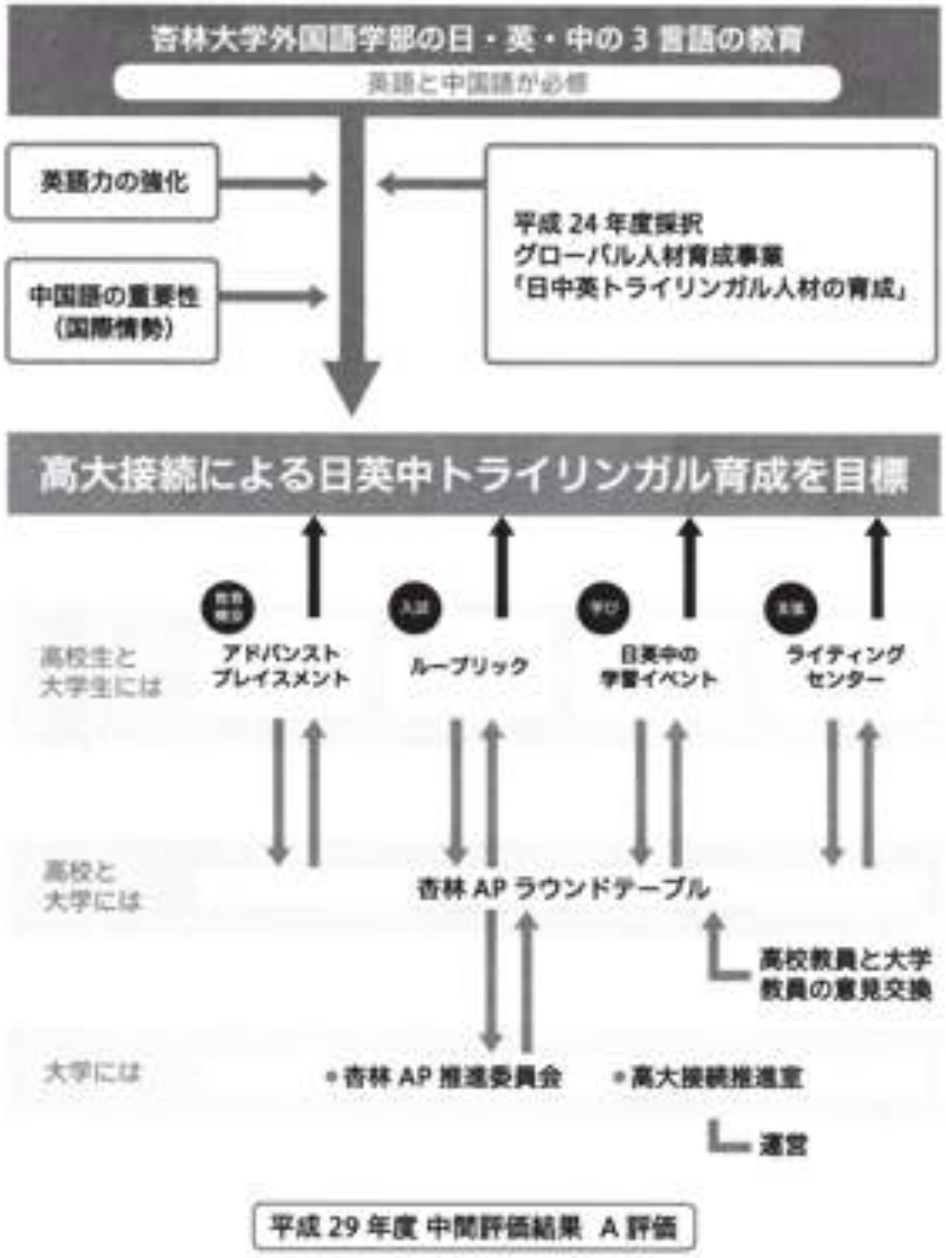
高校側と定期的に意見交換する「杏林 AP ラウンドテーブル」を開催して、高校側の要望を取り入れている。

学内的には、学長、4 学部長等が委員となっている杏林 AP 推進委員会および実務と事業の実質的運営を取り仕切る高大接続推進室（高大接続推進委員会を開催）で、事業の方針、運営、成果の検証などを行い、事業をより良く推進している。

こうした事業の柱となる事業項目の概要を以下のようにイラストとしてまとめた。

杏林大学

「日英中トライリンガル育成のための高大接続」



平成 29 年度 中間評価結果 A 評価

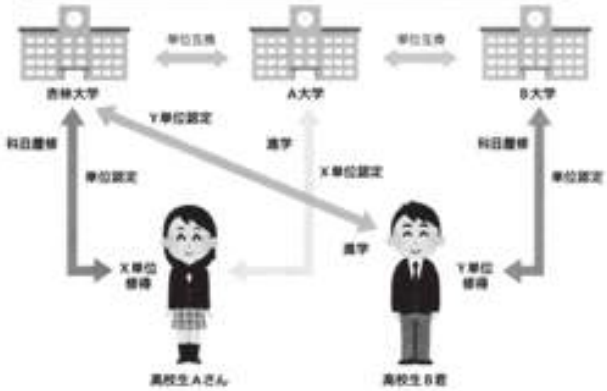
アドバンストプレイスメント（AP）

Advanced Placement

高校生が高校在学中に大学の授業を受け、
その単位が入学後に認定される制度

米国では広く行われている

杏林大学が目指す複数大学とのAP



9校の高校と杏林大学がAPに関する覚書を締結

桜美林大学・共愛学園前橋国際大学・創価大学と杏林大学がAPに関する単位互換の協定を締結

協定大学募集中

6名の高校生が平成29年度のAPを履修した。その内2名が入学。

ルーブリック

Rubric

学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示したもの

多面的能力　主体性・多様性・協働性・課題発見解決力

語学力　話す（対話力）・話す（プレゼン力）・聞く・書く・読む

↓

高校生が自己評価

平成30年度AO入試で選抜に使用した

ルーブリックの実物がございますので、是非ご覧ください

アクティブラーニング

Active Learning

高度な「問題発見力」「問題解決力」「自己表現力」を
総合的に身に付けたグローバル人材を育成します。

日系中トライリンガルキャンプ（一泊二日）
英語キャンプ＆中国語キャンプ
英語プレゼンコンテスト
中国語プレゼンコンテスト

科目・講座

大学教養レベル夏季集中講座
アドバンストプレイスメント科目
グローバル関連科目
COC関連科目

試験

IELTS対策講座
IELTS受検

セミナー・ワークショップ

ライティングセミナー
グローバルAPセミナー
スマホ利用英語学習ワークショップ
※高校への出張もあり

高校生と大学生がお互い刺激し合いながら学ぶ

ライティングセンター

Writing Center

連携高校の高校生や大学生が自分たちの書いた英文について
教員や学生チューターから、添削指導を受けることができる学習施設です

催事	ライティングセミナー（高校生・大学生向け）の開催
目的	留学に必要な英語ライティングの指導 英語レポートの作成・添削
対象	大学生・高校生
内容	1対1 又は グループで行います

要予約
飛び込みも
OKです

Ⅲ．事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム　テーマⅢ（高大接続）「日英中トライリンガル育成のための高大接続」平成 29 年度実績概要

補助事業の目的

本補助事業「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、文部科学省が指定したスーパーグローバルハイスクール（SGH）、SGH アソシエイト、あるいは、指定されなかったがグローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との有機的な高大接続を通して、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速することを目的としている。母語である日本語に加え、英語・中国語を操るトライリンガルになることは、「世界経済の中核を担っている英語圏・中国語圏に伍する日本社会の未来を築く」ため、そして、「地球上のより多くの人とコミュニケーションを通して世界の発展に寄与する」ために極めて有益であるという、本学のグローバル人材育成が拠って立つ認識を高校生にも普及し、高校生・大学生という立場を超えて、ともにグローバル人材を目指す若者が協力し合いながら意欲・能力を涵養しうる一貫した取組を推進していく。その過程で、「大学による高等学校への学修機会の提供」に加え、本学が学生の成長を促す支援の一環として推奨してきた「ピアサポート」すなわち「大学生（留学生を含む）による高校生への学修機会の提供」も意欲的に実施し、「上級生が主体的に下級生に範を示すことによって自らの人格・能力を磨く」というピアサポートの風土の醸成をより一層加速させていく。高校生・大学生、さらには高等学校･大学の教職員が一体となった包括的高大接続を積極的に展開することにより、補助期間終了後も持続的かつ自立的に機能しうる体制の構築ならびにノウハウの集積を図る。

本学は、理事長・学長の強いリーダーシップのもと、「グローバル人材育成」ならびに地域社会の知的基盤となるべく「社会変革のエンジンとなる大学」「地域から世界へ進化する大学」を目指している。本補助事業は、高大接続の観点から、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成」という社会の要請に着実に応える教育的基盤の整備・運用の実質化を試みるものであり、将来的には日本における高大接続のモデルケースとなるべく成果を広く波及させることも目指していく。

補助事業の実績

（1）全体

本事業採択後 4 年目となる平成 29 年度は、平成 28 年度井の頭キャンパス開設により本学の教育・研究機能が三鷹市に集約されたことを契機に、改善されたキャンパスの立地条件を活かし高大連携・高大接続を加速させた。本年度 4 月よりこれまで準備をしてきたアドバンスト・プレイスメントを本格的に実施し、春学期・秋学期合計で事業取組学部である外国語学部の 37 科目だけでなく、医学部 2 科目、

保健学部４科目、総合政策学部の25科目を含む68科目を対象科目として高校生に教育機会を提供した。春学期５名、秋学期１名、合計６名の高校生が履修登録し､このうち４名が単位を修得した。また、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の３大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図った。ライティングセンターの稼働を通じて学生の留学準備の補助機能を強化するとともに、各種学内イベントの高校生への開放や大学全体への事業の波及、それによる各学部教員と高等学校との連携機会の増加を通じて、大学の教育資源をさらに広範囲にわたって高校生に提供した。杏林APラウンドテーブルの継続的開催を通じ、本事業の取組に対する高等学校側からのフィードバックを得る機会を設け、教育効果の向上のための意見交換を定期的に実施した。学内では第三者評価委員会を開催することで、事業の目的・計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し、各種事業の計画・実効性の改善を目指した。高校生への本学が有する教育資源の開放という観点から、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を実施し、さらに、各種教育イベントの提供という観点からは、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」の継続実施に加え、昨年度に引き続き「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。高大接続改革の入試改革として、学力の３要素のうち「主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度」を多面的評価するルーブリックを開発し、本年度実施した平成30年度外国語学部AO入試Ⅱ期（グローバル型）で選抜方法の一部として使用した。

① 「アドバンスト・プレイスメント」の開始

本年度までの準備段階として、大成高等学校、順天高等学校（ＳＧＨ指定校)、神奈川総合高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、武蔵村山高等学校、調布南高等学校、府中東高等学校、藤村女子高等学校の９高校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を締結した。学則・規定等を整え、医学部２科目、保健学部４科目、総合政策学部25科目、外国語学部37科目の68科目を対象科目としてアドバンスト・プレイスメントを開始した。本年度中に桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の３大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず､制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図った。29年度の実績としては、高大連携締結校でもある大成高等学校より春学期５名、秋学期１名、合計６名の履修登録があり、このうち４名がアドバンスト・プレイスメントで単位を修得した。

② 「ライティングセンター」の運営

平成28年４月、井の頭キャンパス移転と同時に移設したライティングセンターが本年度も継続的に稼働し、新任のジェイソン・サマービル特任講師によるワークショップで訓練を受けた大学生９名がピアチューターとして、大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。

平成29年４月、ライティングセンターと授業の連動に関して、平成27年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセン

ターの積極的利用を学生に奨励することと、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。

平成29年6月14日・21日・28日の3週連続でパラグラフの書き方、7月12日・19日の2週連続でエッセイの書き方をテーマにした「英語ライティング・ワークショップ」がジェイソン・サマービル講師によって開催され大学生が多数参加した。

平成29年9月10日、10月15日、11月19日の土曜日に、高校生向け「英語のアカデミック・ライティングセミナー」を開催した。

平成29年11月29日、12月6日の2週連続でジェイソン・サマービル講師による「Eメールライティングワークショップ」が開催され大学生が参加した。

平成29年10月～11月の合計5回の「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催されBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に取り組んだ。

平成29年6月～11月、ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全2回を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。順天高等学校、藤村女子高等学校、関東国際高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ジェイソン・サマービル特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。このほかオープンキャンパスでも高校生に指導を行った。

平成29年9月～平成30年3月、平成30年度のピアチューターの募集を開始し、書類審査ならびに面接を行って、候補者を決定した。内定した候補者はライティングセンターの活動を見学した。

③ 学内外への事業の周知

平成29年4月～平成30年3月、特設サイトを通じて、杏林APラウンドテーブルなどの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語カラオケ・吹替大会」、「IELTS対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐFD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。

平成29年4月～平成30年3月、医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。

平成29年4月～平成30年3月、高大接続推進委員会と全学的な「高大連携推進実行部会」との連動を継続し、双方の委員会の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移転を通じて4学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP補助事業の全学的な波及に結びついた。

④ 「杏林APラウンドテーブル」の継続実施

平成29年5月、第9回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校の12校15名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

平成29年11月、第10回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校、藤村女子高等学校、都立羽村高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校の12校が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

平成30年2月、第11回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校、都立調布南高等学校に都立杉並総合高等学校を加え、計14校20名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

⑤ 「グローバルルーブリック」の活用

平成29年5月、学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力（話す力（対話力＋プレゼンテーション力）、聞く力、書く力、読む力）」に関してのルーブリックを作成し、HP上で公開。同時に、平成30年度外国語学部AO入試第Ⅱ期（グローバル型）でルーブリック・小論文による事前資格審査、ルーブリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表。

（2）教育

⑥ 高大連携イベントの開催

平成29年7月、杏林大学井の頭キャンパスにてグローバルAPセミナーを開催。夏の中国北京研修に参加する聖徳学園高等学校の生徒9名に対して行われた。「中国」をテーマとした模擬講義と同時通訳ブースの見学を通じて研修準備と大学での学びに対しより一層の理解を深めることを目的としている。

平成29年7月、クラーク記念国際高等学校1年生115名と高校教員5名が井の頭キャンパスに来校し、外国語学部教員によるグローバルＡＰセミナー（「皆さんは英語のことをどれだけ知っていますか？」）を受講。また、神奈川総合高等学校でスノードン副学長が高校生40人と教員1人に対して、「日本のあいまいさ」のテーマで英語と日本語による講演を行った。さらに、関東国際高等学校でジェイソン・サマービル特任講師が、高校生40人と高校教員6人に対して、「My country, my city, and the school system」の講演を行った。

平成29年10月、都立武蔵村山高等学校でジェイソン・サマービル特任講師が、「英語発音ワークショップ」をグローバルAPセミナーの一環として実施し、 21名の高校生が参加。

平成29年6月14日・21日・28日の3週連続でパラグラフの書き方、7月12日・19日の2週連続でエッセイの書き方をテーマにした「英語ライティング・ワークショップ」がジェイソン・サマービル講師によって開催され大学生が6人が参加した。

平成29年11月29日、12月6日の2週連続でジェイソン・サマービル講師による「Eメールライティングワークショップ」が開催され大学生3人が参加した。

平成29年10月～11月の合計5回の「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催されBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に7人の大学生が取り組んだ。

平成29年6月～11月、ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全2回を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。順天高等学校、藤村女子高等学校、関東国際高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ジェイソン・サマービル特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。高校生18人が参加した。

平成29年10月、「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替大会」を高大接続の形で実施。「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生5名、「中国語カラオケ・吹替大会」に高校生1名が参加。

⑦ 「教務的制度」の構築

平成29年8月21日、22日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目A「口語中国語」を開講。5名の高校生と33名の在学生が受講。

平成29年8月23日、24日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目B「英語をとりまく多彩な学問」を開講。14名の高校生と65名の在学生が受講。

平成29年8月25日、26日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目C「詐欺罪の国際比較」を開講。1名の高校生と28名の在学生が受講。

平成29年4月～3月、グローバル関連科目50科目、COC関連科目12科目を開講し、それぞれ、延べで4,147人、849人の在学生受講者があった。

⑧ 「アドバンスト・プレイスメント」実施に向けた検討

平成29年3月に桜美林大学、5月に共愛学園前橋国際大学、9月に創価大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、以後この連携4大学でアドバンスト・プレイスメントの単位互換を実施していくことになった。

⑨ 「学修機会」の提供

平成29年8月6日から8日までの2泊3日で、高尾の森わくわくビレッジにおいて、杏林大学の英語キャンプを実施。17名の大学生と8名の高校生が参加し、英語の集中訓練が行われた。

平成30年3月24日・25日の1泊2日で、「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターで実施。本学在学生10名（チューターとして参加、うち3名は留学生）、本学教職員9名、高校生30名が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

⑩ 「教員研修」の実施

平成29年7月「第4回 高校と大学をつなぐFD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長から「地域連携による学びの共有と高大接続～共愛学園前橋国際大学の事例～」と題して講演があり、その後、参加した杏林大学の教職員148名との間で活発な質疑応答・議論が行われた。

（3）事業の評価

⑪ 自己点検・第三者評価委員会

平成29年9月、杏林大学三鷹キャンパスにて3人の外部評価委員として、中学･高等学校の校長（高校教育全般）、大学教授（英語関係）、高校教諭（中国語関係）を招いて大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ（高大接続）の第三者評価委員会を開催した。

平成29年9月、AP推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。

補助事業における具体的な成果

（1）全体

① 「アドバンスト・プレイスメント」の開始

・全学的アドバンスト・プレイスメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけではなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものにすることができるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。

・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

② 「ライティングセンター」の運営

・特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。

・ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの間で協力、調整が行われたことで、指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数・実施した個人チューターセッション回数ともに、センターの稼働率を高水準で維持することに成功した。

・ライティングセンターでのセッション数は春学期120、秋学期91の他、ワークショップで大学生21人、ライティングセミナーで高校生18人、オープンキャンパスで高校生85人にのぼる。また大学生の通常講義での出張指導を97人が受講した。

・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」「Eメールライティングワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。

・「ライティングセミナー」では、1回目はSimile and Metaphor（直喩と隠喩）について学び、「つまらない詩」を「面白い詩」に自分で書き換える表現方法を習得した。また2回目は、自分の関心と英語レベルにより「Postcard Writing」「Report Writing」「Entrance Exam Writing」から選び、自身のライティングスキルの指導を受けた。参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

・平成30年度に向けて早期より次年度ピアチューターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への

引継ぎがスムーズとなり、平成29年度の活動を停滞させることなくそのまま維持することが可能となる。

③ 学内外への事業の周知

・7月に実施した「第4回高校と大学をつなぐFD/SD」では、大学教職員148名が参加し、「地域連携による学びの共有と高大接続」というテーマについて、共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長による講演が行われた。

・8月の夏期休暇を活用して実施した2泊3日の「英語キャンプ」では、17名の大学生と8名の高校生が参加し、大学生とともに英語の集中特訓に取り組んだ。

・8月の夏期休暇を活用して実施した「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では計20名の高校生が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

・10月に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生5名、「中国語カラオケ・吹替大会」に高校生1名が参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

・平成29年10月21日から毎週土曜日6回連続で実施した「IELTS対策講座」では、6名の杏林大学生に高校生41名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

・3月に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では計30名の高校生が参加し、英語や中国語を通した留学生との交流、及び、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

・総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援など、他学部でも個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学の持つ教育資源をより広範囲にわたって高校側に提供することができている。

④ 「杏林APラウンドテーブル」の継続実施

・第9回杏林APラウンドテーブルにおいては大学が提供する英語・中国語の各種イベントのレベルの問題や、英語教育の目的や高校と大学の英語教育の違いがどうあるべきかなどの根本的な問題提起が高校側からあり活発な意見交換が行われた。アドバンスト・プレイスメントについては、通いによる障壁を除くにはオンライン授業ができれば高校生に勧めやすいとの意見が高校側からあり、今後の検討課題を得た。

・第10回杏林APラウンドテーブルにおいては、既に実施された多様な高校生・大学生向けの学修イベントの結果報告と高校側からのフィードバックを受けました。例えば高校では初学者ばかりの中国語では、スピーチコンテンストなどの堅い催しより軽い導入的な機会が良いとの高校側からの昨年度の意見で、今年度は中国語カラオケ大会・吹替大会を行ったことが高評価を得た。高校側でのグローバルウィークに参加したジェイソン特任講師のワークショップでは、スマホを使った英語学習が行われ、高校生のみならず教員に対してもこのような学習機会が役立ったとフィードバックを受けた。中国事前研修では、高校生の動機づけに大変役立ち、帰国後のフォローアップもしていただきたいとの要望が出され、今後の検討を得た。

・第11回杏林APラウンドテーブルにおいては、連携高校が14校ともなると杏林大学の負担も大変なので、大きな学習イベントを開いて複数の高校の高校生や大学生が交流しながら学べる機会をつくれれば、主体性や多様性、協働性といった要素も含んだとても良い高大接続の学習機会にできるのではないかという建設的意見を得た。また、次年度は事業開始から5年目を迎えるので、高校と大学の連携に

よるシンポジウムなども行っていただきたいという要望があり、学習イベントやシンポジウムの企画の段階から、高校と杏林大学が協働して作り上げることが期待された。受益者である高校生や大学生、ひいては高校・大学の教職員の技能向上も含めた密接な高大接続の実現が可能となる。

⑤ 「グローバルルーブリック」の活用

・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性･多様性･協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。

・導入初年度であり、選考日を12月2日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員10名に対し、志願者15名、合格者5名という結果となった。

(2) 教育

⑥ 高大連携イベントの開催

・グローバルAPセミナーでは、「中国」をテーマとした模擬講義と同時通訳ブースの見学を通じて、中国全体と北京についての概要、また中国語の基本について理解し、大学での学びに対しより一層の理解を深めることをできた。

・グローバルAPセミナーでは、英語の歴史や現状、世界で用いられている様々な英語等について、クイズ形式の質問に答えながら理解を深め、さらなる学習への動機づけを与える機会となった。

・英語発音ワークショップでは、L/R,V/B,S/THなど日本人が苦手な発音の違いなどについて、実際に口の作り方や舌の位置などに気を付けながら声に出して学習、コミュニケーション力の向上につながった。

・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」「Eメールライティングワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・「ライティングセミナー」は、1回目はSimile and Metaphor（直喩と隠喩）について学び、「つまらない詩」を「面白い詩」に自分で書き換えること表現方法を習得した。また2回目は、自分の関心と英語レベルにより「Postcard Writing」「Report Writing」「Entrance Exam Writing」から選び、自身のライティングスキルの指導を受けた。参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

・「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替大会」では、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

⑦「教務的制度」の構築

・「口語中国語」では、中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて会話表現や中国語検定対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には中国人留学生が加わり、発音指導や異文化交流を楽しみながら会話練習などを行った。2日目の午後にはグローバルAPセミナー「同時通訳ブース見学会」を合わせて開催し、大学での学びの深化を体験することができた。

・「英語を取り巻く多彩な学問」では、外国語学部に所属する8人の教員から、英語の歴史や英日の発音アクセントの違い、翻訳実務の内幕、英語と観光の関係、さらにはアニメ映画の字幕の工夫にいたるまで、多岐にわたる講義を受講し大学での多彩な学問領域に触れる機会を得た。

・「詐欺罪の国際比較」では、オレオレ詐欺やマルチ商法なども含め、日本の詐欺罪の特徴とその国際比較を行い、アメリカやドイツの詐欺規程の基本論点に関する講義を受講し、法律というものをグローバルに見る視点の素地を身に着ける機会となった。

・多くの在学生がグローバル関連科目やCOC関連科目で学修することによって、杏林大学の目指すグローバル人材育成と地域指向の双方の視点から、さまざまな学修内容を多角的に学ぶ機会となった。

⑧「アドバンスト・プレイスメント」実施に向けた検討

・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

⑨学修機会の提供

・「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。

・「日英中トラインリンガルキャンプ」では、高校生30名に加え、留学生3名を含む大学生10名が参加し、「オリンピック」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、東京オリンピック開催を控え、様々な競技を取り上げ、競技の歴史や異なる文化圏での選手育成方法を比較し、多様性を認識し相対化する重要な機会を得た。また、主にサポート役を担った大学生側も高い意識を持つ高校生に刺激を受け、自身の語学力向上、異文化理解に基づいた協働の必要性の認識を新たにした。

⑩「教員研修」の実施

・「KCGポートフォリオ」を用いて、実践型の学習を可視化しキャリアへの接続を図りながら、高校でも求められているアクティブラーニングのニーズにも応えていくことで高大接続を図る先駆的な取組をしている前橋国際大学の事例を聴き、本学の取組をさらに発展させるための参考となった。

・杏林大学への期待として、MOOCを利用して、杏林大学と地方高校、地方大学がアドバンスト・プレイスメントで結びつき、都内の高校も参加する「地方創生に寄与する都心大学モデル」と「先端の高大接続型入試モデル」の提案がなされ重要な検討課題となった。

（3）事業の評価

⑪ 自己点検・第三者評価委員会

・高校教員と大学教員を経験した委員から、「実際に英語や中国語を使い仕事をしている卒業生や社会人からの話を聞けば、言語を使う仕事のビジョンが明確になり職業選択に繋がるので、そのような試みを発展させてほしい」という建設的意見を受けた。

・中国語の高校教員の委員からは、「事業報告書の中でもう少し具体的に生の学生の声を取り上げた方が良いのではないか。参加者の感想は、参加する前と参加した後の変化や成長が示されるような提示があると活動の成果がより伝わりやすいのではないか」という指摘を受け、同月の AP 推進委員会で具体的改善策を検討した。

Ⅳ．事業実績の具体的内容

〈運　営〉

Ⅳ－１．事業体制の強化

＝１．学内基盤の継続

杏林 AP 推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、本学に高大接続事業を推進するため、「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会（通称「杏林 AP 推進委員会」）を設置している。この委員会は学長を委員長とし、以下副学長、各学部長、高大接続推進室長、学園事務局長らの教職員で構成され、事業活動の遂行状況の把握、事業計画・活動の点検評価、その他高大接続事業に関する業務を司っている。

高大接続推進室と高大接続推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、高等学校・教育団体等との効果的な高大接続のための調査・企画・連携を推進することにより、高等学校と杏林大学の教育内容、教育方法、学習成果、入学選抜、単位認定等の接続・連携を行うことを目的として高大接続推進室を設置し、その中に高大接続推進委員会を組織した。この委員会は室長を委員長とし、各学部からの教育職員と大学事務部長らの事務職員で組織され、推進室運営に関わる基本的事項の審議および各学部間の調整を図っており、事務局を地域交流課（高大接続推進担当）に開設している。

＝２．中期計画高大連携推進部会との連携

「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」と「第 3 次中期計画実行委員会（高大連携推進実行部会）」との連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月、高大接続推進委員会と全学的な「高大連携推進実行部会」との連動を継続し、双方の委員会の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移転を通じて 4 学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP 補助事業の全学的な波及に結びついた。

このことにより・本補助事業で定期的に行っているイベント以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、保健学部による順天高等学校への DNA 関連技術･生物英語の演習、さらに、「大学教養レベル･グローバル関連科目の夏季集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高等学校との連携機会の拡大にも結びついた。

Ⅳ－2.「杏林 AP ラウンドテーブル」の開催

開　催　日：第 9 回　杏林 AP ラウンドテーブル　平成 29 年 5 月 15 日
第 10 回　杏林 AP ラウンドテーブル　平成 29 年 11 月 20 日
第 11 回　杏林 AP ラウンドテーブル　平成 30 年 2 月 19 日

目 的

「杏林 AP ラウンドテーブル」は、連携高校関係者と杏林大学が高等学校から大学までの人材育成について意見交換をする場として、本事業の中核的会議として位置づけられる。これまで高等学校と大学の関係は入学試験のみが接点となる場合がほとんどであったが、今後社会で求められるグローバルな視野と行動力、語学力をもつ人材を育成するため、「杏林 AP ラウンドテーブル」を通じて、教育活動や課外活動、そして教育・学習評価方法等について高等学校側と大学が意見を交換し、お互いのリソースを活用するためのプログラム内容について協議することを目的としている。

内容・実績

第 9 回 「杏林 AP ラウンドテーブル」
開 催 日：平成 29 年 5 月 15 日（月） 18：00
参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、
都立三鷹中等教育学校、大成高等学校、日出学園高等学校、
都立青梅総合高等学校、都立武蔵村山高等学校、
県立神奈川総合高等学校、都立羽村高等学校、
明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校
開催場所：杏林大学井の頭キャンパス 5 階会議室

平成 29 年 5 月 15 日（月）第 9 回「杏林 AP ラウンドテーブル」が、杏林大学井の頭キャンパス 5 階会議室で開催された。第 9 回目となる本会議には過去最高の計 12 校 15 名が、また大学側からは学長以下 17 名の教職員が出席し、活発な意見交換を行うことができた。

1．ライティングセンターの運営

今回が初参加である高等学校の先生の自己紹介と跡見裕学長の挨拶の後、まず今年度からライティングセンターを運営することになったジェイソン・サマービル特任講師の自己紹介が日本語と英語でなされた。ジェイソン・サマービル特任講師が企画・運営する高校生向けライティングセミナーやグローバル AP セミナーの紹介と参加者募集の説明が行われた。

2．学修イベント

その後、今年度の高校生向け各種の学修イベントの予定が説明された。この学修イベントには英語キャンプ、中国語キャンプ、英語と中国語のプレゼンコンテスト、IELTS 対策科目、高校生向け夏季集中講座、アドバンスト・プレイスメントの秋学期開講、そして教員向けの「高校と大学をつなぐ FD/SD」などが含まれる。次に、昨年度の日英中

トライリンガルキャンプ、IELTS 対策講座と受検、春学期のアドバンスト・プレイスメントの状況について報告が行われ、さらにルーブリックを平成 30 年度の外国語学部の AO 入試Ⅱ期で使用する旨の説明がなされた。

3. 意見交換

大学が提供する英語の各種イベントのレベルの問題や、関連して他の高等学校からも、現在では ALT がほとんどの高等学校におり、大学提供の native によるイベントの価値は何か？といった問題提起がなされた。これに対し、本学からは、2 泊 3 日の英語キャンプは日本語を使わずに英語漬けになることや、native 教員の資格や教育レベルの違いが付加価値となることが説明された。一方、他の高等学校からは良質な教育は安価にはできない、という意見もあがり、英語教育の目的や高等学校と大学の英語教育の違いがどうあるべきかなど、根本的な問題提起となった。また、アドバンスト・プレイスメントについては、通いによる障壁を除くにはオンライン授業ができれば高校生に勧めやすい、との意見が高校側からあり、今後の検討課題として本学は受け止めた。一方、文部科学省は大学で授業を受けることの価値を評価していることと、実際にアドバンスト・プレイスメントに生徒を送り出している高等学校からも、大学での学修体験の良さが述べられた。

第 10 回 「杏林 AP ラウンドテーブル」
開 催 日：平成 29 年 11 月 20 日（月） 18：00
参加高校：都立府中東高等学校、都立調布南高等学校、大成高等学校、
聖徳学園高等学校、関東国際高等学校、順天高等学校、
藤村女子高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、
都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、日出学園高等学校
開催場所：杏林大学井の頭キャンパス 5 階会議室

平成 29 年 11 月 20 日（月）第 10 回杏林 AP ラウンドテーブルが井の頭キャンパスで開催された。今回の参加高校は都立府中東高等学校、都立調布南高等学校を新たに迎えた計 12 校で、活発な意見交換がなされた。

1. 学修イベント（報告）

跡見裕学長挨拶のあと、稲垣大輔室長から簡単に AP 事業全体の進捗状況の説明があり、その後、今年度すでに実施している多様な高校生・大学生向けの学修イベントの結果報告と高校側からのフィードバックを受けた。まず、高等学校では初学者ばかりの中国語では、スピーチコンテンストなどの堅い催しより軽い導入的な機会が良いとの高校側からの昨年度の意見で、今年度は中国語カラオケ大会・吹き替え大会を行ったことが、報告された。そして、高校側でのグローバルウィークに参加したジェイソン・サマービル特任講師のワークショップでは、スマホを使った英語学習が行われ、高校生のみならず、教員に対してもこのような学修機会が役立ったとフィードバックを受けた。また、中国事前研修では、高校生の動機づけに大変役立ち、帰国後のフォローアップもしていただきたいとの要望が出された。

2. ライティングセンター

高校生向けに杏林大学のライティングセンターで行っているライティングセミナーでは、絵葉書、レポート、大学入試の 3 種類のメニューを用意しているが、その点について高校側の意見を伺った。例えば、英検のライティング対策的なワークショップだと高校生の目的と合致していているという意見や、そういうテクニカルなものより世界で活躍できる英語力養成の一環としてのライティング指導も必要であり、これらは高校教員が苦手とするものなので杏林大学に期待しているとの意見もあがった。さらに、英語が苦手な生徒には、学習のモーチベーションとなる日々の出来事や気持ちなどを書く練習として、絵葉書レベルが良いという意見も多数だされた。また、ライティングだけでなくスピーキングの指導もしていただければ、という要望もあり、幅広いレベ

ルや内容の英語学習の機会提供を期待されていることを再確認することができた。一方、いろいろな学修イベントのお知らせを杏林大学から高等学校にしてもらって生徒に周知しても、生徒の反応が思わしくないことも多いので残念な面があるとの現状も報告された。

3. アドバンスト・プレイスメント

その後、アドバンスト・プレイスメントについては、1月には科目リストや時間割をお送りすることが説明された。また、高校側から、提携している米国の大学とのあいだでアドバンスト・プレイスメントの単位互換ができるようにできないか、との質問には、米国は大きな機関が全米的に行っており、現状では無理であると回答した。一方、国内の単位互換大学が増えることはアドバンスト・プレイスメントの魅力の向上につながるので、高校側からも関係する大学に話をしていただきたいとの要望が杏林大学から出された。

第11回 「杏林APラウンドテーブル」
開 催 日：平成30年2月19日（月） 18：00
参加高校：都立杉並総合高等学校、大成高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、順天高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校、都立調布南高等学校
開催場所：杏林大学井の頭キャンパス5階会議室

平成30年2月19日に第11回、杏林APラウンドテーブルが井の頭キャンパスで開催された。都立杉並総合高等学校が新たに参加し、計14校から20人の校長、副校長、進路指導担当者、国際教育担当教員らが出席した。

1. 学修イベント

平成29年11月に行われた第10回杏林APラウンドテーブルの後に、高校生向けに行われた学修イベントやセミナー、例えば、医学部や保健学部での実習、高等学校でのGlobal Weekやワールドカフェへの大学教員の派遣、大学通常授業の高校生による特別聴講、IELTS対策講座などの説明が稲垣大輔室長よりあり、高等学校からのフィードバックがなされた。こうした学修機会に参加した各高校からは、高校側の参加の意図なども紹介された。ある高等学校からは、「連携高校が14校ともなると杏林大学の負担も大変なので、大きな学修イベントを開いて、複数の高等学校の高校生や大学生が交流しながら学べる機会をつくれれば、主体性や多様性、協働性といった要素も含んだとても良い高大接続の学修機会にできるのではないか」という意見がだされた。また、来年度は5年目を迎えるので、高等学校と大学の連携によるシンポジウムなども行っていただきたいという要望も挙がった。

2. 意見交換

その後、文部科学省の委託事業で関西学院大学が中心となって取り組んでいるJapan e-Portfolioの話に移り意見交換がなされた。1,700高校、80大学を超える実証実験が行われ、入試改革では高校教員が責任を持つ調査書が自由に作れるようになること、それを補う形で生徒自身の責任で、Japan e-Portfolioを利用した主体性等の評価資料づくり、そしてアドミッション・ポリシーに基づく、それらの入試選抜での利用などについて、説明や意見交換が行われた。電子ポートフォリオは主体性等の評価のための資料とはなるが、生徒が1年生から資料を集めて保存しておくためのツールであることや、それを活用するために「生徒による振り返り」が重要なことなどが高校から指摘された。一方、ポートフォリオやルーブリックといった枠組みに、生徒の活動を押し込めるのは本末転倒になるので、高校生の積極的な活動を誘引できる各種の高大接続による学修機会のほう

が有益である、という意見もあった。

さらに、ある高等学校からは、介護の仕事の一つと高校生が勘違いしている、理学療法士、作業療法士、臨床検査技師、看護師、医師などの仕事がどういうものか高校生が具体的にイメージできるようにして進路指導に活かしたいので、病院見学の要望が出された。次期学長の大瀧保健学部長は、病院は患者様がいるので大勢の見学は無理だが、保健学部等での施設見学、教員による説明などは可能であると返答した。

3. ライティングセミナー

次に、ジェイソン・サマービル特任講師が、英検のライティングについてのセミナーの計画について報告を行った。

4. ルーブリック

開発したルーブリックについては、今年度の外国語学部の AO 入試で使用され、14 人が受験し、ルーブリックと根拠資料を用いたプレゼンで選抜が行われたことが報告された。さらに、高校生に対するメリット・デメリットを考えれば、杏林大学が提供する各種の学修イベントなどへの参加が、入試での評価につながるようにしていただければ尚良い、という意見も出された。

効果・成果

第 9 回杏林 AP ラウンドテーブルにおいては大学が提供する英語･中国語の各種イベントのレベルの問題や、英語教育の目的や高等学校と大学の英語教育の違いがどうあるべきかなどの根本的な問題提起が高校側からあり活発な意見交換が行われた。アドバンスト・プレイスメントについては、通いによる障壁を除くにはオンライン授業ができれば高校生に勧めやすいとの意見が高校側からあり、今後の検討課題を得た。

第 10 回杏林 AP ラウンドテーブルにおいては、既に実施された多様な高校生・大学生向けの学修イベントの結果報告と高校側からのフィードバックを受けた。例えば高等学校では初学者ばかりの中国語では、スピーチコンテンストなどの堅い催しより軽い導入的な機会が良いとの高校側からの昨年度の意見で、今年度は中国語カラオケ大会・吹替大会を行ったことが高評価を得た。高校側でのグローバルウィークに参加したジェイソン・サマービル特任講師のワークショップでは、スマホを使った英語学習が行われ、高校生のみならず教員に対してもこのような学修機会が役立ったとフィードバックを受けた。中国事前研修では、高校生の動機づけに大変役立ち、帰国後のフォローアップもしていただきたいとの要望が出され、今後の検討を得た。

第 11 回杏林 AP ラウンドテーブルにおいては、連携高校が 14 校ともなると杏林大学の負担も大変なので、大きな学修イベントを開いて複数の高等学校の高校生や大学生が交流しながら学べる機会をつくれれば、主体性や多様性、協働性といった要素も含んだとても良い高大接続の学修機会にできるのではないかという建設的意見を得た。また、次年度は事業開始から 5 年目を迎えるので、高等学校と大学の連携によるシンポジウムなども行っていただきたいという要望があり、学修イベントやシンポジウムの企画の段階から、高等学校と杏林大学が協働して作り上げることが期待された。受益者である高校生や大学生、ひいては高等学校・大学の教職員の技能向上も含めた密接な高大接続の実現が可能となる。

Ⅳ－３．連携協定書の調印

平成 29 年度に新たに連携協定を締結した高等学校は以下のとおりである。
・日出学園高等学校　　千葉県市川市
（協定期間：平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日）

目 的

高等学校とグローバル人材育成連携協定を締結し高大接続体制を整備・発展させてゆくことが、継続的な本事業の遂行の要となるため、杏林 AP ラウンドテーブルや日英中トライリンガルキャンプなどに参加する高校と連携協議を行い、連携協定を締結することで相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図ることを目的とする。

内容・実績

杏林大学と日出学園高等学校（千葉県市川市）は、平成 30 年 3 月 6 日（火）夕刻、杏林大学において高大連携の協定書に調印を行った。井の頭キャンパスＣ棟 5 階応接室で行われた調印式には、日出学園高等学校から堤 雅義校長、小内順子副参事、児玉孝喜学園業務部マネージャーが、杏林大学からは跡見裕学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれの代表として堤校長、跡見学長が協定書にサインし、和やかな雰囲気の中、今後も連携を深めていくことを確認した。

日出学園は、幼稚園から高等学校までを有し、国際化の浸透により変革する新しい社会の要請に応える人材育成を目指した少人数教育を実施しており、杏林 AP ラウンドテーブルの場にも初期の頃より参加いただいている。現在、本学外国語学部の教員が出向き、高等学校における英語教育に関し、いろいろアドバイスなどを行っており、今後さらに深い様々な高大連携を実施していくことで双方の同意が得られ、この協定締結に至った。協定では、「杏林大学と日出学園高等学校が、相互の教育に係る交流･連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図るために、次のとおり協定を締結する」とし、以下の活動に取り組んでいく。

(1) 大学の授業科目への特別聴講生の受け入れ
(2) 大学の各種公開講座への聴講生の受け入れ
(3) 大学教員による高校への出張講義
(4) 教育についての情報交換及び交流
(5) その他、双方が協議し同意した事項

Ⅳ－４．高校と大学をつなぐ FD ／ SD の開催

開 催 日：平成 29 年 7 月 19 日
講 演 者：共愛学園前橋国際大学　大森昭生学長
テ ー マ：「地域連携による学びの共有と高大接続～共愛学園前橋国際大学の事例～」
開催場所：杏林大学井の頭キャンパス

目 的

FD/SD は大学の教育と運営に関し、今や必須のものとなっている。大学教職員が高校教育の現状に理解を深め、特に高校でのグローバル化に対応する教育や外部連携について高校側の取り組みを知ることで、杏林大学における「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の推進の一助にする。

内容・実績

平成 29 年 7 月 19 日、「第 4 回高校と大学をつなぐ FD/SD」が開催された。講師は、共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長を招き、「地域連携による学びの共有と高大接続～共愛学園前橋国際大学の事例～」と題して研修が行われた。杏林 AP 推進委員会主催、杏林 CCRC 拠点推進委員会と中期計画 FD/SD 実行部会の共催で行われたこの FD/SD では、148 名の参加者が熱心に先進的事例を学んだ。

まず、大学のある群馬県の 200 万人を切っている人口変化、9,300 人の大学進学者数、22 校の大学数、83 校の高校数、県外進学者 6,100 人、県内就職者 4,000 人などの基礎データの紹介がなされた。その後、この厳しい状況で、大学が行っている地学・教職・学職一体のグローカル人材育成についての具体的内容に移った。人材育成の方向性は、「地元で育てて地元に返す」という地方創生に寄与する。とし、学生や卒業生が地学一体で地元の企業と連携し、ビジネスの実践活動や演習を行っていることが説明された。また、可視化としてアンケート、独自調査・定性評価、外部機関との学習行動調査や PROG の活用が行われており、これらを統合する形で、web ポートフォリオである KYOAI CAREER GATE（KCG）を構築しているとの具体的方法を述べられた。さらに、「高大連携コラボゼミ」として地方創生予算による県や県教育委員会の事業で県が指定した高等学校で、高校生と大学生がアクティブラーニングを展開していることや、大学教職員も県内高等学校への各種講師として多数派遣されている現状、そして地域人材育成を軸として学びの共有と接続のため、地元企業・自治体と県内高等学校と大学が密に連携していることなどの話から、最後に、杏林大学に期待することとして、MOOC を利用して、杏林大学と地方高校、地方大学がアドバンスト・プレイスメントで結びつき、都内の高等学校も参加する「地方創生に寄与する都心大学モデル」と「先端の高大接続型入試モデル」の提案がなされた。講演の後、質疑応答にて活発な意見交換がなされた。

効果・成果

「KCG ポートフォリオ」を用いて、実践型の学習を可視化しキャリアへの接続を図りながら、高校でも求められているアクティブラーニングのニーズにも応えていくことで高大接続を図る先駆的な取組をしている前橋国際大学の事例を聴き、本学の取組をさらに発展させるための参考となった。また、杏林大学への期待として、MOOC を利用して、杏林大学と地方高校、地方大学がアドバンスト・プレイスメントで結びつき、都内の高校も参加する「地方創生に寄与する都心大学モデル」と「先端の高大接続型入試モデル」の提案がなされ重要な検討課題となった。

Ⅳ－５．連携高等学校との意見交換

平成 29 年度も連携高等学校と多くの意見交換がなされ、全体で 50 件あまりとなった。その一部を取り上げ紹介する。

① 大学体験について
対　応　日：平成 29 年 5 月 1 日
高　校　名：神奈川総合高等学校
高校関係者：下薗幸教諭
大学関係者：東克巳特任教授
主 な 話 題：神奈川総合高等学校の生徒 11 名と引率教員 1 名による大学体験の依頼を受け、それについて話し合いを行った。

② ポスターセッションについて
対　応　日：平成 29 年 5 月 25 日
高　校　名：金沢市の私立高等学校
高校関係者：寺西教諭
大学関係者：稲垣大輔高大接続推進室長
主 な 話 題：富山国際会議場においてＡＰ８大学のポスターセッション関連の詳細について話し合いを行った。

③ 中国語学習について
対　応　日：平成 29 年 7 月 10 日
高　校　名：聖徳学園高等学校
高校関係者：今井孝行教諭
大学関係者：藤田由香利講師
主 な 話 題：聖徳学園高等学校の中国事前研修を行い、教員と中国語学習についての意見交換を行った。

④ テキサス A&M 大学について
対　応　日：平成 29 年 7 月 13 日
高　校　名：関東国際高等学校
高校関係者：黒澤副校長　他　計 6 名
大学関係者：ジェイソン・サマービル特任講師
主 な 内 容：ジェイソン・サマービル特任講師のプレゼンと講演、テキサス A&M 大学による国際交流を行い、意見交換を行った。

⑤　英語教育について
対　応　日：平成 29 年 8 月 28 日
高　校　名：日出学園高等学校
高校関係者：鳥尾克二監事、児玉尚樹部長、児玉孝喜マネージャー
大学関係者：坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長、
岩本和良教授、八木橋宏勇准教授、青柳貴徳副部長
主 な 話 題：日出学園の英語教育に対して、岩本教授、八木橋准教授が同校に赴きアドバイスを行っているが、これまでのその進捗状況の報告があり、今後の希望体制についても話し合いが行われた。

⑥　AP 事業について
対　応　日：平成 29 年 9 月 25 日
高　校　名：藤村女子高等学校
高校関係者：矢口秀樹校長、今本登紀子副校長
大学関係者：ポール・スノードン副学長、青柳貴徳副部長、畫間大郎課次長
主 な 話 題：AP 事業の全体の説明及びアドバンスト・プレイスメントや各種イベントへの参加を要請した。また、11 月に行う AP ラウンドテーブルへの参加についても依頼した。先方からは、色々なイベントに参加させて頂ければありがたいとの返事を受けた。

⑦　AP 事業について
対　応　日：平成 29 年 9 月 27 日
高　校　名：武蔵村山高等学校
高校関係者：加藤竜吾校長、澤崎陽彦副校長
大学関係者：八木橋宏勇准教授
主 な 話 題：各種イベントに参加したことについての好意的な感想を受けた。武蔵村山市全体についての小中学校と連携して英語教育の質を地域全体で加速させていきたい、杏林大学もぜひ加わって欲しい、という提案も受けた。なお、当日は八木橋准教授が講演を生徒に対して行った。

⑧ 「国際人とは何か」について
対　応　日：平成 29 年 11 月 4 日
高　校　名：聖徳学園高等学校
高校関係者：山名和樹教諭
大学関係者：坂本ロビン外国語学部長
主 な 話 題：坂本ロビン外国語学部長が、高校生 30 人に向け、「国際人とは何か」の演題で講演を行い、山名和樹教諭と意見交換を行った。

⑨ セミナー・ワークショップについて
対　応　日：平成 30 年 2 月 8 日
高　校　名：調布南高等学校
高校関係者：森川美智恵教諭
大学関係者：ポール・スノードン副学長、ジェイソン・サマービル特任講師
青柳貴徳副部長、畫間大郎課次長
主 な 話 題：高校生 240 人に対する英語学習の刺激となるようなセミナーやワークショップの開催について話し合った。杏林側から提供できるプログラムを示し、高校側は持ち帰って再度検討することになった。

⑩ セミナー・ワークショップについて
対　応　日：平成 30 年 2 月 19 日
高　校　名：藤村女子高等学校
高校関係者：松良薫進路指導部部長
大学関係者：畫間大郎課次長
主 な 話 題：高校生が英語の吉祥寺マップを作成しているが、中国語マップも作成したいという希望があり、本学の先生方と学生に協力願えないかとの相談があった。

Ⅳ－6. Kyorin Writing Center Annual Report 2017 - 2018

Jason Somerville

Director of Kyorin Writing Center

Submitted March 2018

Kyorin Writing Center Objectives

Objective 1: Student Support

The first objective of the Kyorin Writing Center (KWC) is to provide support to students from all university faculties. All students that require help with their written English are welcome in the KWC. Support to the students is provided by specially trained Peer Tutors (PT) in three languages (English, Japanese, and Chinese). Students usually use the KWC for help and support with homework, essay, assignment, presentation (script or PowerPoint slides), and applications (for study abroad programs). Typically, students seek help with ideas, brainstorming, essay structure, sentences and paragraphs, vocabulary, and grammar. The goal of the KWC is for students to play an active role in the help that they receive from the PT. It is important for students to express their own ideas and thoughts in the support process.

Objective 2: Interdepartmental Cooperation and Support

The second objective is to foster greater interdepartmental cooperation in promoting the services of the KWC to the students. Maintaining connections and collaborating with all faculties allows staff to encourage students to seek extracurricular help and support in English writing. Another goal of the KWC is to give support to all staff. Personnel from teaching and administrative staff that need help with their written English are welcome in the KWC.

Objective 3: Affiliated Partners

The third objective is for our Acceleration Program (AP) partners to experience and make use of the many services that the KWC has to offer. It is important for the KWC to maintain existing connections and establish new connections to further promote English education for high school students. Kyorin University listens to our partners and provides seminars and workshops which are suitable for the needs of high school students.

Kyorin Writing Center Activities

The objectives of the KWC were achieved by the following actions and activities which were accomplished during the 2017–2018 academic year.

Tutoring

Tutoring in the KWC was carried out on a one-to-one basis during the spring and autumn semesters. Sometimes groups of students were tutored together when they had a group presentation. Tutoring was carried out mainly by the PT with Mr. Somerville in a supervisory role. Usually students would make an appointment in advance. However, walk-ins were accepted when possible.

Peer Tutors

During the spring semester eight PT from Japan and China worked in the KWC. This number rose to ten PT in the autumn semester. All PT were new to the KWC for the academic year 2017–2018. After initial training PT were allowed to work with customers (students) usually tutoring. PT also helped prepare the KWC for open campus and writing seminars and also assisted in workshops. In addition to tutoring PT were asked to make posters and flyers and also conduct special drop-ins for IELTS writing practice.

Open Campus

The KWC was open for business for each of five open campus days and was staffed by at least two PT and Mr. Somerville. Three activities were created to allow high school students to experience university life at Kyorin. The three activities ranged in difficulty and were Postcard Writing, Report Writing, and Entrance Exam Writing. Students were encouraged and supported by the PT and given one-to-one help and feedback. Students (and also parents) dropped in at various times throughout the day with each session usually lasting around 20 minutes. However, some students stayed for over an hour. In total the KWC served 85 students over the five days.

Workshops

Four workshops for university students were taught during the two semesters in the KWC. These workshops were created to build upon and enhance regular lessons and were advertised, promoted and open to all students. PT assisted when they were available.

1. English Writing: The paragraph–three 90 minute lessons Seven students attended
2. English Writing: The five paragraph essay–three 90 minute lessons Six students attended
3. Presentation Skills–five 90 minute lessons Eight students attended
4. Email Writing: two 90 minute lessons Six students attended

Outreach Activities

During the academic year two Global AP Writing Seminars were held in the KWC on Saturday afternoon. The purpose was to give participating high school students a taste of university life and also a chance to work on activities not taught at high school level. The first writing seminar concentrated on writing two parts of figurative language (creative language): simile and metaphor. Both are useful tools for helping English language students become more fluent and expressive in their writing. 12 high school students attended and were supported by three PT. The students were all given help and feedback with corrections and comments delivered by Mr. Somerville assisted by the PT. The BigPad was utilized in the seminar and was a helpful tool. The second writing seminar brought together all three activities used in the open campus tutorials. All students completed Postcard Writing, Report

Writing, and Entrance Exam Writing. They were given specialized help on how to structure their paragraphs academically with the 'hamburger paragraph' style introduced. Six high school students attended and were supported by three PT.

Mr. Somerville visited several affiliated partner schools throughout the year as part of the Global AP Seminar. This was a great chance to take the services of the KWC to our partner high schools for the promotion of English and intercultural communication. Four high schools were visited (one twice) with a mixture of lecture (The town of Edinburgh and the school system in Scotland), lesson (Pronunciation), and workshop (Mobile-assisted Language Learning–Smartphones to encourage greater student interaction). 117 students attended the Global AP Seminar. See 'Statistics' section for breakdown of students.

Statistics

The following tables summarize data for the academic year 2017–2018.

Number of individual tutoring sessions

Spring term	120
Autumn term	91
Total	211

Number of students served

Spring term	79
Autumn term	69
Total	148

Number of visits per student

	1 visit	2-3 visits	4 or more visits
Spring term	54	23	2
Autumn term	50	14	5

Faculty from which students came to the KWC

	Foreign Studies	Social Science	Health Science	Medical
Spring term	59	12	8	0
Autumn term	44	23	2	0

Students who visited the KWC, by year

	1st	2nd	3rd	4th	Graduate	Staff
Spring term	10	51	7	8	0	3
Autumn term	23	32	4	5	0	5

Note: workshop university students (21) and writing seminar high school students (18) are not included in the data above.

Outreach Activity High School Students

Global AP Writing Seminar (in KWC)

Writing Seminar: - June: 12 students
Writing Seminar - October: 6 students
18 in total

Global AP Seminar (visiting high schools)

Kawagawa Sogo: 23 students
Kanto Kokusai: 25 students
Musashi Murayama: 24 students
Junten: 16 students
Kanto Kokusai: 29 students
117 in total

Open campus (in KWC)
85 students in total

Kyorin Writing Center Outcomes

As no official data from research was carried out, it is difficult to determine the extent to which the tutoring that the students received in the KWC during the academic year 2017–2018 improved student performance. However, from talking with students and teachers, the staff of the KWC (Mr. Somerville and PT) believes and surmises that students (and staff) have greatly benefitted from the KWC services, and hence the objectives of the KWC have been met.

Students

Students who visited the KWC received personalized, individual help from specially trained PT. The PT assisted the students in writing better, more focused, more structured essays. Some student brought in a paragraph or a presentation script, others brought in a five paragraph essay, but they all received ideas and advice on how to make their writing more academic and suitable for university standard. Students who entered under confident and lacking in written accuracy left with a sense of accomplishment and belief that they could improve their writing. It is believed that students felt happier and more positive about learning English after visiting the KWC. After talking with teachers whose students received help and support from the KWC, teachers commented on how students' performance in homework, presentation (content) and grades improved. Several students were also asked if their visit to the KWC made a difference and they replied positively.

Staff

Not only students, but also staff members used the services of the KWC, from professors who needed help writing an academic paper to administration staff who needed help with emails and presentations. The feedback given was effective.

Peer Tutors

All PT for the academic year were new to the KWC, so initial training in two academic writing workshops really got them up to speed quick and gave them the confidence to be effective PT. Throughout the year PT have not only continued to learn and improve their academic writing, but improve their personal and social skills. Their 'customer service' has been honed over the year and they are now able to offer the benefits of improved English skill as well as assisting and satisfying students' needs. This was also evident in the PT helping high school students and putting them at ease. The PT helped to bridge the gap between the teacher (Mr. Somerville) and the high school students and showed them how get the best out of their university experience. Some PT started in the KWC a little scared and

overwhelmed, but have now transformed into confident and educated young adults whose performance in essays and assignments has vastly improved. During the year all PT have completed on-the-job training from an academic writing textbook and a common English errors textbook. The intercultural benefits between the Japanese and Chinese students really took off with a lot of new friendships forged. Exchanging ideas and talking about customs was a joy to witness. It is Mr. Somerville's belief that the PT have greatly benefitted from their time in the KWC.

Affiliated Partners

The connections between Kyorin University and our partner high schools has continued to strengthen, which is evident from the feedback given about the services of the KWC at the AP Round Table meeting. We are continuing to work together to better the English skill and intercultural communication of the high school students. By communicating with our high school partners new ideas for the next Global AP Writing Seminar have already been acted upon as the KWC works towards the needs of our customers. The building of relationships between the KWC and partner high schools is continuing into the next academic year with many principals and teachers keen to employ the services of the KWC.

Conclusion

Further development of activities of the KWC is continuing and plans are already continuing to get the best out of the resources available. It is hoped that the KWC will advance and go from strength to strength.

The continued cooperation between all Kyorin staff to promote the services of the KWC is important for increasing student numbers. Support from all faculties is essential to the goals of the KWC. By encouraging students teachers can have a positive effect on the way the KWC functions.

Maintaining a dialog with our partner high schools is important so that the KWC is able to offer not just events and activities for university students, but also tailor the needs of each high school to their students. A symposium to bring together English and Chinese cultural aspects was suggested at the last AP Round Table meeting of the academic year. This kind is feedback and request which can be acted upon, creates a stronger and successful relationship between Kyorin University and its partners in equally shared goals.

Technology in the classroom is now playing a big part in education throughout the world. It is hoped to incorporate this into the KWC. The majority of students who visit the KWC still write using pen and paper, so more research on how to use the technology for writing and using mobile devices will be explored. In addition, the use of an online booking system would be beneficial in making appointments, which would make visiting the KWC more efficient and much easier for students. Research on this is being investigated by Mr. Somerville and it is hoped that there will be a budget allocated to facilitate this move to an online appointment system.

The ongoing success of the KWC is an important aspect of Kyorin University's overall mission for the future. With sufficient backing the objectives of the KWC will progress and endure and university students, high school students and Kyorin staff will reap the benefits of this valuable resource.

Ⅳ－7．アドバンスト・プレイスメントの実施と生徒募集

本年度までの準備段階として、大成高等学校、順天高等学校（ＳＧＨ指定校）、神奈川総合高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、武蔵村山高等学校、調布南高等学校、府中東高等学校、藤村女子高等学校の９校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を締結した。学則･規定等を整え、医学部２科目、保健学部４科目、総合政策学部25科目、外国語学部37科目の68科目を対象科目としてアドバンスト・プレイスメントを開始した。本年度中に桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の３大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図った。

内容・実績

平成29年度の実績としては、共愛学園前橋国際大学と創価大学との大学間単位互換協定を締結することで、高大連携締結校でもある大成高等学校より春学期５名、秋学期１名、合計６名の履修登録があり、このうち４名がアドバンスト・プレイスメントで単位を修得した。更に２名が入学予定となった。

共愛学園前橋国際大学とアドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定を締結

平成29年､共愛学園前橋国際大学（群馬県前橋市）とアドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定を締結した。本学では今年度より、高校生が大学のキャンパスに来て授業を履修し、定期試験まで受けて単位認定まで行うアドバンスト・プレイスメントの制度をスタートし、同時に複数の大学間で、高校生が取得したアドバンスト・プレイスメントの単位を認定し合う新たな制度構築について模索してきた。今回の協定締結は､今年１月に本学のポール・スノードン副学長が、この制度の趣旨を説明するため、共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長を訪問したのがきっかけで、その後両校の同意が得られ実現に至った。

創価大学とアドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定を締結

平成29年９月、杏林大学と創価大学の間の、アドバンスト・プレイスメントによる大学間単位互換協定締結式が行われた。創価大学からは、馬場善久学長、山岡政紀アドミッションズセンター長、京田芳典アドミッションズセンター副課長が、本学からは、跡見 裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席した。冒頭、跡見学長は、「本学は３年前に文科省のＡＰ補助事業に採択され、この４月より、高校生が大学の授業を受講し、単位を先取りするアドバンスト・プレイスメントを開始しました。さらに高校側からの要望も取り入れ、複数の大学間で単位を認定し合う制度を模索し、既に桜美林大学、共愛学園前橋国際大学とその協定を締結致しました。この度ご縁があり、創価大学とこの協定を締結できることは本学にとって大変光栄なことであり、今後両者の関係を強固にしていくとともに、この締結がさらに多くの大学と連携を結ぶきっかけになると大いに期待しております」と述べた。続いて、創価大学の馬場学長が、「米国に留学した時に、このアドバンスト・プレイスメントの制度があるのを知り、高校生に大学の門戸を開放するとても画期的なものであると感心しました。日本ではこれまであまり馴染みのない制度でしたが、杏林大学で大学間の単位互換を推進していることをお聞きし本学でも検討した結果、参加させていただくことに決定しました。これからさらに協定大学を増やし、この制度が浸透していくことを望んでおります」と挨拶し、その後両学長が、それぞれ協定書に署名して締結式は終了した。

成果・成果

全学的アドバンスト・プレイスメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけではなく、大学

進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものにすることができるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。また、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の３大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

Ⅳ－８．大学教養レベル「グローバル関連科目」高校生への開放

目的

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」は高校生と大学生が共に学ぶことを目的とし、平成28年度より開始した。今年度は平成29年8月21日から26日にかけて科目A「口語中国語」・科目B「英語をとりまく多彩な学問」・科目C「詐欺罪の国際比較」の3講座を開講した。また、平成30年2月には「大学教養レベル・グローバル関連科目の春季集中講座」を開講した。

内容・実績

大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座

科目A「口語中国語」

平成29年8月21日と22日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目A「口語中国語」を開講し、5名の高校生と33名の在学生が参加した。

中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて会話表現や中国語検定対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には中国人留学生が加わり、発音指導や交流を楽しみながら会話練習などを行った。中国語漬けの集中講座は学生たちにとって有意義な2日間となった。

科目B「英語をとりまく多彩な学問」

平成29年8月23日と24日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目B「英語をとりまく多彩な学問」を開講した。本講座は高大接続推進の一環として実施されたもので、14名の高校生と65名の在学生が同教室に会し、外国語学部に所属する8人の教員から、英語の歴史や英日の発音アクセントの違い、翻訳実務の内幕、英語と観光の関係、さらにはアニメ映画の字幕の工夫にいたるまで、非常に多岐にわたる講義を受けた。授業後に実施したアンケートでは、今回のイベントについて98%の参加者が有益だったと答えており、受講した高校生からは、「すごく面白かったです！新たな発見が沢山出来ました！」、「とても面白い授業でした。この2日間で様々な自分の考え方が変わりました」といったコメントが寄せられた。

科目C「詐欺罪の国際比較」

平成29年8月25日と26日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目C「詐欺罪の国際比較」を開講し、1名の高校生と28名の在学生が参加した。オレオレ詐欺やマルチ商法なども含め、日本の詐欺罪の特徴とその国際比較を行い、アメリカやドイツの詐欺規程の基本論点を明らかにした。25日は、日本の伝統的な詐欺罪の規定について説明を受け、アメリカ法律協会が1960年代に完成させた「模範刑法典」の原文をみなで読む時間も設け学んだ（高校生の参加者は流暢に英文を読み、大学生の参加者が驚く場面もあった）。26日には、2001年に立法された日本の「支払用カード電磁的記録に関する罪」やスイス刑法の条文の解説が行われた。またドイツの連邦通常裁判所の窃盗と詐欺の類別に関する著名な判例を読み、参加者との間で議論する場面もあった。大変、難しい内容であるにもかかわらず、高校生も真剣に理解に努めた。

大学教養レベル・グローバル関連科目の春季集中講座

「比較文化論Ⅱ－2」

平成30年2月8日から10日1限～5限の3日間にわたり15コマを、杏林大学井の頭キャンパスで行った。

この科目講座には高大接続の一環で、1名の高校生と3名の在学生が参加した。講座では楠家重敏教授による「比較文化論Ⅱ－2」で日本と西洋の文化を理解することを目標に、質疑応答やグループワークを行い共に学んだ。

効果・成果

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を通じ、計16名の高校生が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

Ⅳ－9. グローバル関連科目・COC関連科目の高校生への開放

平成29年11月14日、日本文化論（荒川みどり教授、鄭英淑准教授）と観光学入門（古本泰之准教授）の講義を、関東国際高等学校の高校生16名（各8名ずつ）が特別聴講生として授業に参加した。この大学の授業における高校生の受け入れは、正規の授業科目におけるオープン化の一環として実施された。授業の内容や学生の視点からの評価を高校作成のシートに記入後、担当教員からフィードバックのコメントを受けた。

Ⅳ－10. 日英中トライリンガルキャンプの実施

実 施 日：平成30年3月24日・3月25日
場　　所：多摩永山情報教育センター
参 加 者：高大連携高校生　30名
杏林大学学生（ピアチューター）7名、杏林大学留学生3名
杏林大学教職員9名

目 的

この学修キャンプは、平成26年度に本学が採択された文科省『大学教育再生加速プログラム（高大接続）』の取組の一環として行われる短期集中プログラムであり、留学経験者や海外留学生を中心とする外国語学部の学生と国際志向の強い高校生とが学年や学校の枠を超えて交流し、日本語・英語・中国語の重要性を再確認することを目的としています。

内容・実績

平成30年3月24日と25日の二日間にわたり、多摩市の多摩永山情報教育センターにおいて、杏林大学日英中トライリンガルキャンプが一泊二日で実施され、高校生30名、本学在学生10名（チューターとして参加、うち3名は留学生）、本学教職員9名が参加した。今年度は例年のキャンプと少し趣向を変え、中国語の学びに重点を置いた内容で行った。

初日は、小田急永山駅南口に集合し、多摩永山情報教育センターに到着後すぐ演習室に移動しプログラムが始まった。高校生は6グループに分かれ、進行役の宮首ゼミナールの学生から2日間の日程のオリエンテーションを受けた。続いてウォーミングアップとして、ハイタッチ自己紹介を日本語と英語で、フルーツバスケットを日本語、英語、中国語を使って行い、お互いの緊張が少しほぐれた。

次に、オリンピック等をテーマに、中国からの留学生2人と日本人学生2人のプレゼンテーションが行われた。その後、高校生たちは、各グループに分かれ、翌日の発表準備に取りかかった。発表内容は、「各グループで指定されたオリンピック競技（グループ毎に、卓球・バドミントン・サッカー・テニス・柔道・空手）について話し合い、その競技に関わる様々な情報（歴史・各国の代表選手・競技方法・特徴等）を収集し、パワーポイントにて行う」というもので、各グループにチューターである本学学生が付き、適確なアドバイスを行いながら準備活動は夕食後まで続いた。

二日目は、朝食後、発表用パワーポイントの最終確認を行った後で、グループ毎に発表となった。発表ルールとして、「発表時間は10分以内。発表する際、自己紹介を中国語＋英語で行う。パワーポイント作成にあたり、タイトルは中国語と英語の両方を記載する」などの条件が課されましたが、高校生たちは自分の持てる力を駆使して発表し、グループ毎に独自の演出（中国語）を加えるなど、堂々とした発表がなされた。全ての発表終了後、参加高校生一人一人に大学生から修了証が手渡された。

効果・成果

「日英中トラインリンガルキャンプ」では、高校生30名に加え、留学生3名を含む大学生10名が参加し、「オリンピック」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、東京オリンピック開催を控え、様々な競技を取り上げ、競技の歴史や異なる文化圏での選手育成方法を比較し、多様性を認識し相対化する重要な機会を得た。このキャンプに参加した生徒たちから、「入学前に英語、中国語に触れ、発表するという貴重な体験ができて良かった」、「このキャンプで中国語に触れる第一歩が踏み出せた」、「中国からの留学生の先輩と接触することができ、高校で学んでいる中国語がもっと上達するよう頑張ろうと思った」などの声を聞くことができた。また、主にサポート役を担った大学生側も高い意識を持つ高校生に刺激を受け、自身の語学力向上、異文化理解に基づいた協働の必要性の認識を新たにした。

Ⅳ－11．英語キャンプの実施

平成29年8月6日から8日までの2泊3日で、高尾の森わくわくビレッジにおいて、杏林大学の英語キャンプが行われ、17名の大学生と8名の高校生が参加した。英語で自己紹介などをしてお互いを知る英語のゲームから始まり、休日のことについて話したり葉書を書いたりすることで、さらに親密度を深めることができた。英語力を多面的に使うために、英語で書くおかしな話題についてのフェイク・ニュースをグループで作るプロジェクトを開始した。翌日はBBQも行い、フェイク・ニュースのプレゼンテーションのためのポスターを作成し、最終日にはニュースのプレゼンが個人とグループで行われ、発表のしかたや発音、イントネーションなどの指導が行われた。

この「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。

The Kyorin summer English Camp was successfully held at Waku Waku Village in Takao from Sunday, August 6th to Tuesday, August 8th. Eight high school students and 17 university students attended. On Sunday afternoon all the students were split into groups and participated in a memory game to learn each other's names and share personal information. This was followed by another activity where they had to tell truths and a lie about themselves. These activities were designed for the students to become familiar with each other whilst speaking in English. The next lesson was talking about holidays and making postcards. The evening session was focused on the 'News Presentation' which was the main task during the camp. The students had to make a group presentation of fake news. The news was supposed to be crazy and strange. This encouraged the students to really use their imaginations and be creative. Included in the presentation were two or three news headlines and one or two sport headlines followed by the weather. After writing their scripts the students made a poster.

On Monday morning the students continued working on their scripts for the News Presentation. At lunch the students and teachers had a BBQ in the outdoor area, which involved chopping wood and then making a fire. The students thoroughly enjoyed the preparation process and then of course the food. Later in the afternoon and in the evening session the students continued working on their presentation. By the end of the evening at 9pm the students had finished their scripts and posters.

On the last day after breakfast the students practiced for the News Presentation individually and together in groups. Help was given on delivery skills, such as pronunciation, intonation, fluency and transitioning. The students were encouraged to use eye contact and use gestures. After the practice the students presented their news and all groups did an excellent job. The combination of high school students and university students was a winner with all groups working hard to complete their tasks. We successfully wrapped up and then finished the camp around 1pm.

Ⅳ－12．中国語研修の実施

平成29年8月7日と8月8日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて、中国語のステップアップを目指した中国語の学内研修を行った。研修は本学にて中国語を学んでいる中級レベルの学生を対象としており、今回の研修では中国語学科の学生23名に加え、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の一環として関東国際高等学校からの高校生3名も加わり、計26名の参加となった。

中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は2クラスに分かれて文法の復習や検定試験の対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には各クラスに中国人留学生が加わり、発音指導や交流を楽しみながら会話練習などを行い、学生は中国語での映画の一場面を見ながらセリフの書き取りにも挑戦することができた。

学生たちにとって中国語漬けの学内研修は有意義な2日間となった。普段とは違う環境の中で内容濃く学ぶことによって、個々の成長がみられた。

Ⅳ－ 13．プレゼンテーションコンテストの実施

目的

これまで本学在学生を対象として実施していた「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促す。

【英語プレゼンテーションコンテスト 2017】

内容・実績

平成 29 年 10 月 7 日に、杏園祭と同時開催で『英語プレゼンテーションコンテスト 2017』を実施した。当日は、神奈川総合高等学校から 3 名、聖徳学園高等学校から 2 名、そして、杏林大学から 10 名の学生が参加し、それぞれ、ビジネスプランや教育に関する提言をテーマに、プレゼンテーションのスキルや英語での表現力、説明力を競い合った。そして、33 名が集まった中には、高校教員 2 名、高校の英語助手の米国人学生 2 名もおり、プレゼンテーションについての質問を行った。最終的に各プレゼンテーションは 2 名の審査員によって評価され、最優秀賞と特別賞が決定された。

最優秀賞は、興味深いアイデアと着想で審査員の心を掴んだ神奈川総合高等学校の本田彩夏さん（Food Waste）と、抜群の説明力と動画を駆使し、双方向的なプレゼンテーションを展開した神奈川総合高等学校の加古ひな多さん（How to Get Familiar with French Accent English）の 2 名に贈られた。

また、特別賞として、世界の優れた教育システムを明快に紹介した神奈川総合高等学校の引地顕佳理さん（Interesting Education System in the World）1 名と、杏林大学の澤田結佳さん、椎野あやこさん、渡邊瑞希さんのチーム（Interesting Education in the World）1 チームに贈られた。

【中国語カラオケ大会・吹き替え大会】

内容・実績

2017 年 10 月 7 日、杏園祭の初日に井の頭キャンパス F 棟の国際交流プラザにて中国語学科の張弘ゼミナール主催による中国語カラオケ大会が開催された。

中国語学科の 1 年生 6 グループと中国人留学生 6 名に加え、高大接続の連携校である関東国際高等学校より高校生 1 名が参加した。参加者も含め来場者 61 名と会場の賑わうなか、大会が始まった。

張弘ゼミナール 8 名が司会進行を務め、オープニングにはダンスを披露し会場を盛り上げた。続いて中国語学科 1 年生、高校生が中国語で歌い、特別企画として中国人留学生による日本の歌へと移った。審査員は中国語学科の教員 3 名、中国人留学生 4 名と、当日応援に駆けつけてくださった関東国際高等学校の白井先生にも加わって頂き審査した。厳選な審査の結果、入賞者は以下のチームとなった。

優　勝：関東国際高校の白樺さん
（曲名：　隠形的翅膀　見えない翼）
準優勝：チーム Japanese Human
（曲名：　哆啦 A 梦　　ドラえもん）
特別賞：チーム劉建
（曲名：　发如雪　　雪のような髪）

中国語を 4 月から習い始めて半年が経ち、どの学生にも成長がみられた。この経験を踏まえ、より中国語の学習に励んでくれることを期待します。

効果・成果

大学生と高校生が一堂に会し、日々の学修の成果を競い合うというのは貴重な機会であるだけに、双方がお互いから刺激を受けることとなった。今回参加された皆さんがこの経験を一つの糧としてさらに高い目標を達成できるよう邁進していってくれることを願いつつ、杏林大学では今後もこのようなイベントを豊富に用意し、高大接続の機会拡大を図っていきたい。

Ⅳ－ 14．グローバル AP 「同時通訳ブース見学会」の実施

目 的

杏林大学の外国語学部中国語学科では「中国語学科・日中通訳翻訳プログラム」を通じて 4 年間で世界に通用する中国語が使える人材育成を目指しており、本学には同時通訳演習室が設置されている。本見学会は本学学生と高校生に実際の授業で使用する同時通訳演習室を体験してもらい、大学での学びに対しより一層の理解を深めることを目的として行った。

内容・実績

平成 29 年 8 月 8 日、杏林大学井の頭キャンパスにてグローバル AP「同時通訳ブース見学会」を開催した。当日は本学外国語学部 1 年生・2 年生の 23 名、連携高校の生徒 3 名が参加した。高校生は初めに施設説明を受け、実際に通訳ブースに入り機器の操作などを体感した。見学会に参加した高校生からは「同時通訳演習室という部屋を見学し、オリンピックなどで使用されているものと同じ機械が置いてあり、すごいなと思った。同時通訳についてもっと知りたいと思った」「大学でこんな勉強もできるなんて知らなかった。日本語と中国語を同時に聞いて不思議な感じがした」という声があった。

効果・成果

今回の見学会を通じ、本学での学びが少しでも高校生に伝わったのではないかと感じられると同時に、こうした施設に対する高校生の関心の高さも伺えた。

Ⅳ－ 15．グローバル AP「ライティングセミナー」の実施

（平成 29 年 10 月 21 日）

The fall Writing Seminar place on Saturday, October 21st, 2017 and was attended by six students from three senior high schools (Musashi Murayama, Junten and Kanto Kokusai). Three KWC Peer Tutors attended the seminar and assisted the teacher. There were three writing tasks: Postcard Writing, Report Writing and Entrance Exam Writing. The students were required to complete all of the above tasks. The students who participated received one-to-one help and assistance with either the Peer Tutors or the teacher.

After completion of the Postcard, students were introduced to the 'Hamburger Paragraph' and encouraged to write with proper academic structure (topic sentence, supporting sentences, and concluding sentence). The students did an excellent job and added more details and structure to their already formidable writing skills. The seminar was wrapped up with a short survey and then photographs.

Ⅳ－ 16．IELTS 対策講座と試験実施

実 施 日：平成 29 年 10 月 21 日～平成 29 年 11 月 25 日
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス

目 的

英語学習に意欲的な高校生に英語検定試験とその対策講座を開放することで、大学での学びに向けた語学力の確認を目的とする。また本講座は、高大接続の観点からIELTSの試験を受験希望する在校生と高校生に対し、IELTS を主宰する日本英語検定協会の講座対策プログラムを、民間から派遣された講師が大学の教室で講義を行うプログラムである。

内容・実績

平成 29 年 10 月 21 日（土）から毎週土曜日、6 回連続で、IELTS 対策講座が実施された。この講座には順天高等学校、聖徳学園高等学校、関東国際高等学校から計 41 名の高校生と杏林大学生 6 名が参加して、学習した。IELTS 受検に特化したレクチャーを、英国人講師からコンピュータ室で、映像と音声を使い、リーディング、ライティング、リスニングなどをすべて英語で学んだ。

効果・成果

対策講座の受講でアカデミックな英語力を向上させ、検定試験受検に至る学習意欲を継続できた。

Ⅳ－ 17. ルーブリックの改良と入学試験での適応

目的

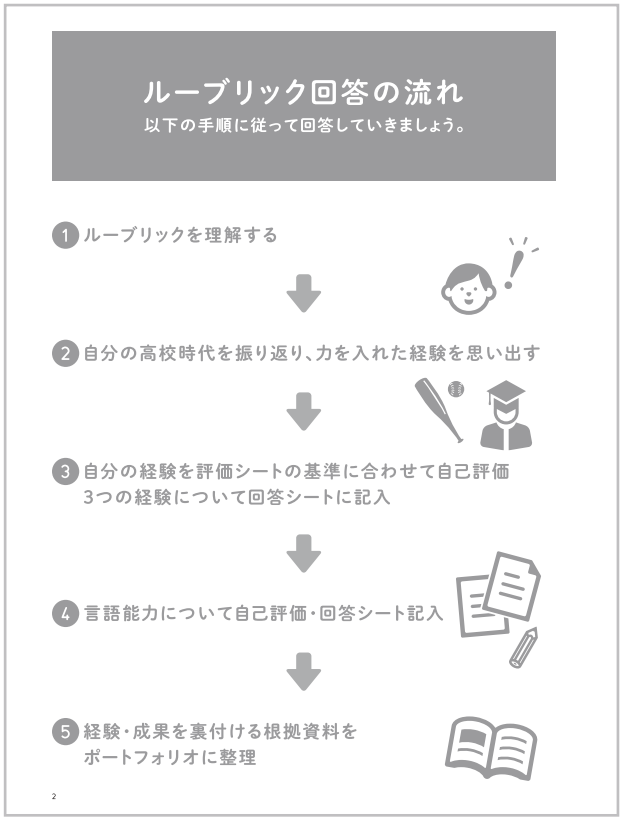
平成 26 年度より開発が始まったルーブリックの目的は、学力の 3 要素のうち、試験でなく課外活動や種々の体験で評価されやすい主体性、協働性、多様性、課題発見・解決力および言語の 4 要素を図るためである。

内容・実績

平成 29 年 5 月、学力の 3 要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力（話す力（対話力＋プレゼンテーション力）、聞く力、書く力、読む力）」に関してのルーブリックを作成し、HP 上で公開した。同時に、平成 30 年度外国語学部 AO 入試第Ⅱ期（グローバル型）でルーブリック・小論文による事前資格審査、ルーブリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表した。

効果・結果

学力の 3 要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。また、導入初年度であり、選考日を 12 月 2 日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員 10 名に対し、志願者 15 名、合格者 5 名という結果となった。



Ⅳ－ 18. 高等学校での講演

日　　時：平成 29 年 7 月 6 日
主　　催：神奈川総合高等学校
講　演　者：ポール・スノードン副学長
講演テーマ：「日本のあいまいさ」
参　加　者：高校生 40 名以上

日　　時：平成 29 年 7 月 10 日
　　グローバルＡＰセミナー
主　　催：聖徳学園高等学校
講　　師：藤田由香利講師
講演テーマ：中国（語）について
参　加　者：高校生 9 名、高校教員 1 名

日　　時：平成 29 年 7 月 13 日
主　　催：関東国際高等学校
講　演　者：ジェイソン・サマービル特任講師
講演テーマ：スコットランドとエジンバラそしてその地の教育システムについて
参　加　者：高校生 40 名、高校教員 6 名

日　　時：平成 29 年 7 月 14 日
主　　催：神奈川総合高等学校
講　演　者：ジェイソン・サマービル特任講師
講演テーマ：今後の協力についてのニーズ分析
参　加　者：高校生 25 名、高校教員 1 名、Garfield 高校の生徒 5 人

日　　時：平成 29 年 7 月 13 日
主　　催：関東国際高等学校
発 表 者：Texas　A&M　大学の学生 20 名（杏林大学に滞在中の学生）
講演テーマ：国際交流
参 加 者：高校生 40 名、高校教員 6 名

日　　時：平成 29 年 7 月 19 日
グローバルＡＰセミナー
主　　催：クラーク記念国際高等学校
講 演 者：北村一真准教授
講演テーマ：「皆さんは英語のことをどれだけ知っていますか？」
参 加 者：高校生 115 名（1 年生）、高校教員 5 名

日　　時：平成 29 年 9 月 27 日
主　　催：武蔵村山高等学校
講 演 者：八木橋宏勇准教授
講演テーマ：「ジブリ映画字幕翻訳から学ぶ異文化間コミュニケーション」
参 加 者：高校生 70 名、高校教員 4 名

日　　時：平成 29 年 10 月 27 日
Global Week1 ①
主　　催：順天高等学校
講 演 者：宮首弘子（張弘）教授
手 伝 い：中国留学生 6 名
講演テーマ：「あなたの知らない中国の高校生生活」
参 加 者：高校生 24 名

日　　時：平成 29 年 11 月 1 日
Global Week ②
主　　催：順天高等学校
講　演　者：ポール・スノードン副学長
講演テーマ：「Lost in Transcription」
参　加　者：高校生 3 名、高校教員 5 名

日　　時：平成 29 年 11 月 2 日
Global Week ③
主　　催：順天高等学校
講　　師：ジェイソン・サマービル特任講師
講演テーマ：「Students interaction in English using smartphone apps」
参　加　者：高校生 14 名、高校教員 4 名

日　　時：平成 29 年 11 月 8 日
Global Week ④
主　　催：順天高等学校
講　演　者：マルコム・フィールド教授
講演テーマ：「Introducing research methods」
参　加　者：高校生 2 名、AET3 名、高校教員 2 名

日　　時：平成 29 年 11 月 4 日
グローバルデイ
主　　催：聖徳学園高等学校
講　演　者：坂本ロビン外国語学部長
講演テーマ：① Always say yes.
② Try going to a foreign country.
③Don’t be shy. You may not have a second chance.
参　加　者：高校生 30 名

日　　時：平成 29 年 12 月 10 日
　　第 9 回ワールド・カフェ
主　　催：神奈川総合高等学校
講 演 者：マルコム・フィールド教授
講演テーマ：Modern Technology　　Traditional Culture
参 加 者：高校生 200 名、高校教員 20 名

日　　時：平成 29 年 12 月 19 日・20 日
主　　催：関東国際高等学校
講 演 者：ジェイソン・サマービル特任講師
講演テーマ：スマートフォンを利用した英語ワークショップ
参 加 者：高校生 28 名（1 日目）、29 名（2 日目）

〈波及効果〉

連携協定高等学校からの要請や本事業にて開催している「杏林 AP ラウンドテーブル」を通じて、高大接続活動の一環として高等学校への出張講演や実習など様々な活動を実施している。本事業での活動が全学的な波及効果へと繋がり、高大接続・高大連携による協力も緊密となった。

Ⅳ－ 19. 聖徳学園中高生ピアサポーターのいじめ防止活動を支援する大学生のピアエデュケーション活動

日　　時：平成 29 年 6 月 17 日
主　　催：聖徳学園中学・高等学校「いじめ防止プログラム推進」
担当教員：杏林大学総保健学部看護学科学校看護学教室　亀崎路子教授
内　　容：「いじめ防止プログラム推進」の一貫として活動を支援

目 的

本活動は、聖徳学園中学・高等学校（武蔵野市）において、いじめ防止を目的に活動しようとしているピアサポーター（中学・高校生）と、その生徒達を支援しようと集まってきた大学生との共同プロジェクトである。

内容・実績

平成 29 年 6 月 17 日に、担当のスクールカウンセラーの山名和樹先生とピアサポーターの生徒を、杏林大学に招き、初の顔合わせを行い、いじめについて本音で語り合うことから始めた。その後、8 月 5 日に企画検討を行い、いじめについて自分達に何ができるか、活発な意見交換が行われた。その後の近隣校とのいじめ防止サミットの開催では、他校の生徒会の生徒さんたちと交流し、今後のいじめ防止に対する取り組みを話し合い、やるべきことを導いていた。また、グループセッションを通じて、今後活動する上でのスローガンを「見て見ぬフリをするキミは共犯者？」に決定し、傍観している人に向けてのメッセージとして、キャリサポ通信を発行するに至った。平成 30 年 3 月 7 日に行われた振り返りの会では、活動当初は消極的で「どうせ無理」といった否定的な意見が多かったが、大学生との関わりを通じて、顔つきが変わり、笑顔が見られ、「もっと、こういうことがしたい」といった意欲的な意見や、現状と課題についても考えられるようになっていると感じた。

効果・成果

大学生は、中高生に「自分が人の役に立つことが出来る存在だと思ってもらいたい」というねらいを持って関わってきたが、中高生が成長した姿を誇らしげに眺めている様子が見られた。

いじめ防止プログラム	月日	活動内容	参加者
①計画	6月17日	第1回ミーティング ：問題意識の共有・願いの表出	中高生5人 大学生6人
	8月5日	第2回ミーティング ：企画検討・実施計画	中高生5人 大学生5人
②準備	8月30日	文化祭に向けての準備	中高生5人
③共同プロジェクトの実施（アクション）	9月17日 ～18日	太子祭（文化祭）発表 いじめについてのアンケート実施	中高生7人 大学生5人
④近隣校とのいじめ防止サミット	11月5日	いじめサミットの開催 ピアサポ通信・ポスターの掲示	中高生10人 大学生1人
⑤振り返り	3月7日	振り返りミーティング	中高生5人 大学生10人

Ⅳ－20．神奈川総合高等学校の生徒が井の頭キャンパスで大学体験

日　　時：平成29年5月1日
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス
担当教員：看護・養護教育学専攻太田ひろみ教授、
　　臨床検査技術学科東克巳特任教授
内　　容：大学体験
参 加 者：神奈川総合高等学校11名

目 的

杏林大学と神奈川総合高等学校は、昨年末に高大連携協定を締結し、それに基づいて盛んな交流が行われているが、今回の大学体験もその高大連携の一環として高校側から依頼があり実現した活動である。

内容・実績

平成29年5月1日神奈川県立神奈川総合高等学校の女子生徒11名と引率教員1名が井の頭キャンパスを訪れ、保健学部の体験授業を受講した。生徒たちは、まずA棟3階の看護学科看護・養護教育学専攻の太田ひろみ教授を訪ね、母子看護学実習室において、乳児モデルを用いた身長・体重・頭囲・腹囲の測定、聴診器を用いた呼吸音・心音の学生同士での聴取、バイタルサインベビーを用いた乳児の呼吸音・心音の聴取等を2班に分かれて実施していった。その際、太田教授の他に2名の教員が付いて指導に当たった。続いて、A棟2階の臨床検査技術学科東克巳特任教授を訪問し、第2実習室において採血の体験実習を行った。最初に15分ほど東特任教授より採血に関する基礎知識の講話が行われ、その後いよいよ模擬腕によるシリンジ採血を体験した。この実習でも、東特任教授の他、2名の教員と3名の卒研学生が付いて、生徒たちに指導を行った。2つの実習を体験した後、井の頭キャンパスの構内見学を行い、まずC棟の井の頭図書館を司書の案内で2階から4階まで見学し、次にE棟2階のＰＢＬ教室、F棟2階の英語サロン、中国語サロン、ライティングセンターを回った。

効果・成果

高校と違った環境で専門的な知識を学ぶことで、大学での学びを体感することができた。

Ⅳ－21．青梅総合高等学校と昭和鉄道高等学校の生徒４名がインターンシップを体験

日　　時：平成 29 年 7 月 24 日・25 日
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス
担　　当：杏林大学キャリアサポートセンター、高大接続推進室、入学センター
内　　容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシップを体験
参 加 者：都立青梅総合高等学校の生徒２名、昭和鉄道高等学校の生徒２名

目 的

都立青梅総合高等学校と昭和鉄道高等学校の要請を受け、高校生に働くことに対しての意識付けを目的とし本学にて職業体験を実施した。

内容・実績

高大接続推進室に来校した生徒たちは、まず地域交流課高大接続推進担当の職員とともにキャリアサポートセンターに向かい、担当課長から「働くということ」についてのガイダンスを受けた。その後、2 人一組で午前中は高大接続推進室と入学センターでの業務を体験し、高大接続推進室ではアンケートの集計、入学センターではオープンキャンパス用の袋詰め作業等を行った。昼休みに学食を体験後、午後からは図書館で書架の移動、学生支援課では自転車置き場の整理、番号確認作業等を職員の指導を受けながら遂行し、初日の予定を終了。二日目は、始めにキャリアサポートセンターで「大学の仕事について」再びガイダンスを受けた後、同センター内でパソコン入力作業の指導を受け実践し、入学センターではナンバリングの作業等を行った。午後からは、昨日に続いて図書館でカウンター業務等、高大接続推進室では各種書類の整理等を体験した。

効果・成果

生徒たちからは、「大学の事務職は、デスクワークだけというイメージだったが、表からは見えない様々な業務があることがわかり、またその一端を体験できて良かった」、「体験した部署の職員がとても優しく指導してくれたので感謝したい。学生の先輩方も食堂で声をかけてくれたりして親近感を覚えた」、「今回のインターンシップの体験を、今後の自分の高校生活に活かしていきたい」などの感想が聞かれ、高校生の働くことに対する意識が強く感じられた。

Ⅳ－22．三鷹中等教育学校生徒が職場見学および職場体験

日　　時：平成 29 年 11 月 14 日・11 月 15 日～ 17 日
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス
担　　当：杏林大学キャリアサポートセンター
内　　容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシップを体験
参 加 者：三鷹中等教育学校生徒（中学 1 年生）4 名、（中学 2 年生）3 名

目 的

三鷹中等教育学校より要請を受け、「働くことの大切さを学ぶとともに、自分の進路に関心を持ち、目的意識を高め、望ましい職業観・勤労観を身につけて日常生活の向上に資する」、「地域の大人とふれあうことにより、社会の一員として社会性を身に付ける機会とする」ことを目的とし実施した。

内容・実績

職場見学は 4 名が参加し、オリエンテーションの後、入学センター、高大接続推進室、教務課、学生支援課、地域交流課、キャリアサポートセンター、井の頭図書館、情報センターを見学し、最後に、1 日の振り返りを記入し、大学職員が生徒の質問に答えた。

また、職場体験は 3 名が参加し、初日のガイダンスの後、学生支援課、井の頭図書館、入学センター、キャリアサポートセンターで、各種の作業を体験した。自転車置き場の整理や受験生向け書類の分類整理作業、PC 入力や掲示物の貼付、図書館での書架移動やカウンター受付業務など、幅広い仕事を体験した。

効果・成果

毎日、仕事の最後には振り返りの記入と大学職員との質疑応答で、大学の事務の仕事を通して、「働くこととはどういうことか」についても各自が考える良い体験ができたことから、職場見学を通じて高校生は働くことに対して意識を強め、本見学会の目的を果たしたといえる。

Ⅳ－23．聖徳学園高校生への医学部での「電子顕微鏡」の実習開催

日　　時：平成 29 年 11 月 25 日
場　　所：三鷹キャンパス基礎医学研究棟 5 階実習室及び地下 1 階電子顕微鏡室
担当教員：医学部解剖学教室（顕微解剖学）教員（川上速人教授　他）
電子顕微鏡部門スタッフ
内　　容：「電子顕微鏡体験実習」
参 加 者：聖徳学園中学・高等学校の生徒 15 名、教員 1 名

目 的

聖徳学園中学・高等学校からの要請を受け、本学医学部と連携し、高校生に対して大学の授業を体験させることで、意識向上や大学における具体的な学びについて考えさせることを目的とし、実習を行った。

内容・実績

まず始めに川上教授より、本日の実習で使用する電子顕微鏡＜走査型電子顕微鏡（走査電顕、SEM）と透過型電子顕微鏡（透過電顕、TEM）＞について、説明が行われた。その後、2 グループに分かれ、電子顕微鏡室にて「走査電顕の試料作製」と「走査電顕の観察」、「透過電顕の観察」を行った。「走査電顕の試料作製」では、各自が持参したサンプル（毛髪、爪、落ち葉など）を走査電顕で観察できるように処理。「走査電顕の観察」では、各自が処理したサンプルを観察し、顕微鏡の操作と写真撮影を体験した。「透過電顕の観察」では、電子顕微鏡室であらかじめ準備した肝臓や副腎のサンプルを観察し、顕微鏡の操作と写真撮影を体験した。

効果・成果

まとめの時間では、生徒一人ひとりから電子顕微鏡を実際に触れてみての感想を発表し、生徒からは「普段、触れられない機器に触れることができてよかった」、「生物の授業で習ったコルジ体を絵や写真ではなく初めてちゃんと見ることができたので、とても楽しかった」などの声が聞け、本実習を通じて、大学での学びを高校生に体験させ理解させることができたと共に、本学と聖徳学園中学・高等学校との連携強化に繋がった。

Ⅳ－24．おもてなしボランティア「英語＆観光ワークショップ」の実施

日　　時：平成 29 年 12 月 16 日
場　　所：井の頭キャンパス「交流プラザ」
担当教員：倉林秀男准教授、野口洋平准教授
　　倉林ゼミナール・野口ゼミナール学生一同
内　　容：おもてなしボランティア「英語＆観光ワークショップ」
参 加 者：高校生 13 名

目 的

本イベントおよび教材作成等の事前準備、新宿・新大久保エリア、谷中・根津・千駄木エリアでの 2 回のフィールドワークは、地域交流活動を通じた教育活動を目的とする。

内容・実績

外国語学部･倉林ゼミナールと野口ゼミナールは、12 月 16 日（土）午後に井の頭キャンパス「交流プラザ」を会場に、おもてなしボランティア「英語＆観光ワークショップ」を開催した。本イベントは、杏林大学の「地域交流活動支援事業」の支援を受けた地域交流活動で、訪日外国人旅行者の増加と 3 年後に迫る東京オリンピック・パラリンピック 2020 に向けて、東京を訪れる外国人を想定した（1）災害時の英語対応、（2）東京の新たな魅力の発見、の 2 点をテーマにした、現役大学生による中高生向けワークショップである。当日は、都内の中学校、高等学校などに通う生徒ら 13 名が参加し、すべてのプログラム終了後には、参加者全員に参加証が手渡された。

野口ゼミナールの学生が担当する第 1 部「東京観光の新たな魅力の発見」では、5 つのグループに分かれて､それぞれ｢食べもの｣｢飲みもの｣｢雑貨｣｢スポット｣｢レストラン｣をテーマに話し合い､ターゲット、セールスポイント、売り方について模造紙にまとめる作業を行い、最後に各グループがプレゼンテーションを行った。

倉林ゼミナールの学生が担当する第 2 部では、災害時に訪都中の外国人とコミュニケーションを取るための「やさしい英語」表現をグループワーク形式で学んだ。グループワークで使用したテキストは、「ことばの通じない国で被災した場合の身の安全」を中心に、倉林ゼミナールの学生たちが独自に編纂したものである。

効果・成果

参加した中高生たちは、簡単な表現でここまでコミュニケーションが取れることが理解できたように感じ、本学学生にとっても貴重な経験を得る機会となった。

Ⅳ－25. 馬田啓一賞を関東国際高等学校生徒が受賞

目 的

本コンテストは、書評・エッセイを募集するコンテストであり、総合政策学部馬田啓一名誉教授の同学部への寄付を財源とし、学生の研究及び勉学の奨励ならびに同学部の発展を目的とし、毎年一定の課題を募集している。

内容・実績

平成29年度の馬田啓一賞の選考が平成29年7月より始まった。これは書評・エッセイを募集するコンテストであり、総合政策学部に在籍する学生と国内外の高校生を対象とした2部門からなり、今年の総合政策学部生の部のテーマは常見陽平著『なぜ、残業はなくならないのか』（祥伝社、2017）の書評（3000字程度）で、高校生の部のテーマは「民主主義」についての作文（2000字程度）にて参加者を募った。

平成29年度の課題テーマ：

総合政策学部生の部	課題図書：『なぜ、残業はなくならないのか』祥伝社（2017/4/1）常見陽平を読んだ上での書評　3,000字程度 ◎評価のポイント 1. 本の概要が正確に分かりやすくまとめられているか。 2. 本の著者の主張に対して、単なる印象や感想を超えた評価がなされているか。 3. 本の著者の主張と区別された独自の主張がなされているか。 4. 書評としての論理構成に加え、誤字脱字の有無含む型式面が満たされているか。
高校生の部	作文テーマ：「民主主義」について 2,000字程度 ◎評価のポイント 「民主主義」に関して、今の日本や世界を見て思うことや、身近で感じることなどを取り上げ、自分の意見を書いてもらいます。“本来こうあるべきだ”“自分は将来こうしていきたい”という視点でもOKです。自由な発想で書いてください。 発想のユニークさや説得力だけでなく、誤字脱字の有無などの形式面も評価の対象です。

効果・成果

平成29年12月20日に授賞式が行われ、大学生の部では、最優秀賞に三瓶結香さん、優秀賞に髙木達也さん、綱川ひよりさん、滝田茉優さんの3名が選ばれた。高校生の部では、関東国際高等学校の堀結貴さんが選ばれた。この活動により選出された大学生や高校生にとって彼らの学びに対する更なる励みとなったことが伺えた。

Ⅳ－26．順天高校の生徒に対し保健学部でＤＮＡ関連技術実習を実施

日　　時：平成30年2月17日
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　保健学部Ａ棟第4実習室
担当教員：保健学部臨床検査技術学科相磯聡子教授
　　保健学部臨床検査技術学科ダシャカ・シーヴァスリアム講師
内　　容：ＤＮＡ関連技術演習
参 加 者：順天高等学校の生徒23名（1年生）

目 的

基礎的な大学での生物学実習を体験することで、TRI Programの概略を理解し、TRI Programの中で使用する機器に慣れ、またその中で使用する英単語に慣れること等を目的としている。

内容・実績

平成30年2月17日、順天高等学校の生徒23名が引率教員2名とともに杏林大学井の頭キャンパスを訪れ、保健学部Ａ棟第4実習室においてＤＮＡ関連技術演習を受講した。

今回の演習は、順天高等学校と杏林大学との高大連携の一環として企画されたもので、昨年度に続いて4回目の開催となる。来校したのは、順天高校Ｓ（サイエンス）クラスの1年生で、来年の7月にはTRI（オーストラリア生物医学研究機関）での海外研修に参加する予定になっている生徒である。

生徒たちは実習室に到着するとまず実習用の白衣に着替え、臨床検査技術学科の相磯聡子教授から諸注意を受けた後、早速マイクロピペットによる計量等、基本操作の演習や制限酵素によるプラスミドＤＮＡの切断等を行った。昼食を挟んで午後からは、アガロースゲルへの試料の添加演習や同じ臨床検査技術学科のダシャカ・シーヴァスリアム講師による英語の基本用語の発音練習指導、また英語による実験手順の聞き取り練習等を体験した。

効果・成果

参加した生徒たちからは、「マイクロピペットなど、高等学校にはない様々な器具に触れることができ、大学の実験室での実習を体験できてとても良かった」、「今日メディカルイングリッシュの専門用語を耳にし、もっと英語力を向上させなければと思った」などの感想を聞くことができ今回の演習を実施することにより高大の連携の活動により広がりが持てた。

Ⅳ－27．マスコミ取材

■「教育人会議　2017 秋号」に他の AP8 大学とともに、事業概要が掲載される

高大接続

Case 7

吉林大学

大学生に対して行って来たグローバル人材育成事業を高校に積極的に開放

■「Between　情報サイト」からアドバンストプレイスメントの取材を受け、掲載される。

Ⅳ－28．平成 28 年度事業報告書の作成と配布

目 的

事業報告書の作成・印刷・送付を行うことによって、事業の成果を広く公表することを目的とする。

内容・実績

平成 29 年 5 月から 6 月にかけて、平成 28 年度分の事業報告書を作成し、特設サイトで公開するとともに本学外国語学部、総合政策学部の全専任教員、医学部・保健学部の全教授に 1 部ずつ配布した。また、愛知県から北海道までの SGH 校及び SGH アソシエイトの高等学校約 100 校に送付した。

効果・成果

昨年に引き続き広く杏林大学の AP 事業の取組みを大学の内外に周知することで、学内では医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問の出張講義などがより頻繁に行われるようになり、大学生や高校生にとって他分野での協働学習が可能となると同時に、他大学からの本事業に関する教職員の訪問を受けるなど、杏林大学の本事業の取組みの学外での認知度も大いに向上することとなった。

Ⅳ－29. 杏林AP推進委員会(第16回～第21回)

平成29年度
第16回　杏林AP推進委員会

日　　時：平成29年4月17日（月）16：30～17：30
場　　所：杏林大学三鷹キャンパス　本部棟6階　大会議室

平成29年度
第17回　杏林AP推進委員会

日　　時：平成29年7月10日（月）11：00～12：00
場　　所：杏林大学三鷹キャンパス　本部棟6階　大会議室

平成29年度
第18回　杏林AP推進委員会

日　　時：平成29年9月4日（月）10：00～10：45
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C棟5階　大会議室

平成29年度
第19回　杏林AP推進委員会

日　　時：平成29年11月13日（月）11：00～12：00
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C棟5階　大会議室

平成 29 年度
第 20 回　杏林 AP 推進委員会

日　　時：平成 30 年 1 月 29 日（月）11：15 ～ 12：00
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 21 回　杏林 AP 推進委員会

日　　時：平成 30 年 3 月 12 日（月）15：35 ～ 16：10
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

Ⅳ－30. 高大接続推進委員会(第27回～第35回)

平成 29 年度
第 27 回　高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 4 月 12 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 28 回　高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 5 月 10 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 29 回　高大接続推進委員会
第 1 回　中期計画高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 6 月 7 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

★今回より中期計画の高大接続推進室の会議と同時開催する。

平成 29 年度
第 30 回　高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 7 月 5 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 31 回　高大接続推進委員会
第 2 回　中期計画高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 9 月 6 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 32 回　高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 10 月 4 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 33 回　高大接続推進委員会
第 3 回　中期計画高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 11 月 8 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 34 回　高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 12 月 6 日（水）16：20 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

平成 29 年度
第 35 回　高大接続推進委員会
第 4 回　中期計画高大接続推進委員会

日　　時：平成 29 年 2 月 14 日（水）11：00 ～
場　　所：杏林大学井の頭キャンパス　C 棟 5 階　大会議室

Ⅴ．事業の評価：平成 28 年度事業を対象に

第三者評価委員会の評価報告書は下記のとおりである。

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成28年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】
日時： 平成29年9月16日（土）14：00～15：20
場所： 杏林大学 三鷹キャンパス 本部棟11階 貴賓室
評価委員： 委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）→ 欠席
委　員 鈴木　栄氏（東京女子大学 教授）
委　員 藤井達也氏（埼玉県立伊奈学園総合高等学校 教諭）

杏林大学参加者： 跡見 裕学長、ポール・スノードン副学長、坂本ロビン外国語学部長、
稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】
平成26年度にスタートした「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業は、過去２年間の実施を踏まえ、３年目となる昨年度はその構想した事業の完成期を迎えつつある充実した年度であったと全体的に評価することができる。
文部科学省は、高校教育の改革・入試改革・大学教育の改革の三位一体の高大接続改革を進めている最中であり、杏林大学の全学的グローバル教育推進の中に位置づけられた高大接続事業は、杏林ＡＰラウンドテーブルという場において、高校側と大学側の意見交換をもとに、高校側の教育理念に適合するように調整しながらスタートしており、それが高校の教員・生徒の主体性を喚起し、同時に連携という協働性を生み出す開放性につながっている。 つまり、与えられた問題を解いて終わりではなく、問題を自ら発見し、創造的問題解決を果たそうというモチベーションが生まれている。
ルーブリックについてはさらに改良が進み、コンセプトブックができていて、ＡＯ入試など、学習履歴の書き方が生徒に公開されており、入試を行う以前に自己評価によって、自己変容のための契機を創り出すモチベーションを内燃させることが期待できる。
アドバンストプレイスメントは、非常に興味深い取り組みだが、既にアドバンストプレイスメントに係るラウンドテーブルも引き続き開催され、大学間でのその単位互換協定締結による新たな枠組みにも期待がかかる。
言語能力のルーブリックのレベルは、グローバル人材を目指す教育であるならばB2レベルを目指すべきである。

ルーブリックやアドバンストプレイスメントなどもwebを利用することで、eポートフォリオや反転事業によるアクティブラーニングへの発展が期待される。職業選択という点で、実際に英語や中国語を使い仕事をしている卒業生や、会社の人からの話を聞き、ワークショップに参加することで、言語を使用する仕事のビジョンが明確になると思われる。
トライリンガルキャンプなどを通して、英語・中国語・日本語を使った活動、及びそれぞれの文化理解のきっかけは実施されているので、今後は、この３つの言語を同様に使いこなすことのできる人材育成の取り組みを進めてほしい。
事業報告書の中で、例えばキャンプなどに参加した高校生の生の声をもう少し具体的に表記したり、事業遂行上の問題点を書き残すことで、後につづく大学、高校への有益な示唆とすることができる。

【評価のまとめ】
平成28年度事業は前年度に比べさらにその成熟度を増しており、引き続き他大学および高校の3つのポリシーデザインに対しロールモデルとなることが期待できる。また、ルーブリックを利用したＡＯ入試に向けて準備が整い、その本格的な実施に期待が高まる。また、アドバンストプレイスメントの本格的な実施に向けての準備が整いつつあり、さらに大学間の単位互換協定締結という新たなＡＰの形が実現することにも注目したい。

【添付資料】
第三者評価書３通
・平方邦行委員長
・鈴木 栄委員
・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】
・平成28年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成28年度

以上

Ⅵ．中間評価を受審(平成26年度～平成28年度を対象)

大学教育再生加速プログラム（AP）中間評価結果

整理番号	16	大学等名	[illegible]
[illegible]	[illegible]		

【総括評価】

Ａ：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

[illegible]

・[illegible]

・[illegible]

・[illegible]

・[illegible]

・[illegible]

[illegible]

・[illegible]

・[illegible]

Ⅶ. 事業推進組織　委員一覧

平成 29 年度　杏林 AP 推進委員会　委員一覧

跡見　裕	学　　長
ポール・スノードン	副 学 長
渡邊　卓	医学部長
大瀧純一	保健学部長
大川昌利	総合政策学部長
坂本ロビン	外国語学部長
稲垣大輔	高大接続推進室長（外国語学部教授）
蒔田耕平	事務局長
島津敏雄	広報・企画調査室長
黒田幸司	大学事務部長
内藤俊朗	井の頭事務部長
森　芳久	井の頭事務部副部長
青柳貴徳	井の頭事務部副部長
晝間大郎	地域交流課（高大接続推進担当）課次長（事務局）

平成 29 年度　高大接続推進委員会　委員一覧

室　長	稲垣大輔	外国語学部
	進邦徹夫	総合政策学部
	粟﨑　健	医学部
	阪本奈美子	保健学部
	岡村　裕	総合政策学部
	高田京子	総合政策学部
	北村一真	外国語学部
	藤田由香利	外国語学部
	ジェイソン・サマービル	特任講師
	黒田幸司	大学事務部
	内藤俊朗	井の頭事務部
	浅野　稔	医学部事務部
	森　芳久	井の頭事務部
	青柳貴徳	井の頭事務部
	晝間大郎	高大接続担当（事務局）
	小金井恵美	高大接続担当（事務局）

文部科学省「大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）」平成26年度採択
日英中トライリンガル育成のための高大接続

平成29年度　事業報告書

発 行 日　平成30年７月
編集発行　杏林大学 高大接続推進室
〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1
TEL 0422-47-8000　　FAX 0422-47-8056
http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/trilingual/

KYORIN